西朋22

西朋登高会

西朋 22

西 朋 登 高 会

目 次

巻頭言　山本 泉 ---------- 3

山行総覧 ---------- 5

山行記録　1982年度 ---------- 11
1983年度 ---------- 25
1984年度 ---------- 47

NWVC 活動報告 ---------- 64

会務報告 ---------- 66

紀行・随筆 ---------- 68

巻頭言

山本 泉

ヒトの進化の歴史をみると、大部分は狩猟と採集の歴史である。ヒトの肉体と精神の基本的構造は、狩りの中で徐々に形づくられてきた。獲物をもとめて1日20km あまりを歩くこと、獲物を追って1～2km 走ること、しとめた獲物を背負って帰ることなどが、日常的な肉体的活動であった。また、言語や動作による意志の疎通、役割りの分担と協力、リーダーシップとフォロワーシップなどの個体間の相互関係が狩りには不可欠であり、そこに人間の精神活動の原型をみることができる。

農業革命は、ヒトの進化の歴史からみればつい最近の出来事だが、余剰生産物、人口の過密、階級分化などをもたらしただけでなく、ヒトの本来的な生活を疎外し、同時にヒトの肉体的精神的活動を疎外した。産業革命、都市革命、情報革命を通じて、ヒトの肉体的精神的活動の疎外はますます強化されてきた。

このような閉塞した情況の中で、ヒトは狩りに代わる代償行為を求めてきた。狩りをするという精神構造は、疎外されたとはいえ、現代の生活に息づいている。たとえば、商社マンが、1億円の商取引をまとめたことは、マンモス狩りに匹敵するし、医者がめずらしい病気をみつけて学会で報告するのも、まるで、狩りの獲物をみせているようなものだ。そういう特別のことがなくても、ヒトは毎日、今日は何かおもしろいことはないかと獲物を求めている。

スポーツは、狩りの獲物の代償として、得点や記録という獲物を設定している。登山は一般のスポーツとちがって、得点や記録という獲物がない。むしろ、登山は、狩りの過程そのものの疑似行為であって、獲物のない狩りの再現と考えられる。狩りと違う点は、武器をもたないこと、食糧を採集せずもっていくこと、獲物を背負って帰る喜びの代わりにザックを背負うことなどである。

山登りは、狩りの疑似行為であるから、そこには、現代の生活で疎外された肉体と精神の解放がある。

狩りには数人から十数人の協力が必要であろう。そこにはリーダーがいて、各メンバーの役割りがあるだろう。生活する上での人間関係の基本は狩りの中で形成されてきた。狩りの疑似行為である登山においては、学校や仕事場では得られないような人間関係が、ヒト本来の姿で作られることが期待できる。

近代アルピニズムは、現在、壁につきあたっている。登頂という目的が、先験的に　定され（狩りの獲物とされ）、それに至る技術や経験の集積が問題にされてきた。具体的にはヒマラヤの山の初登頂とか、厳冬期初登頂とか、バリエーションルートとして北壁初登頂とかが1つの目的とされてきた。

私には、これらの記録には全く興味がない。こういう獲物を求めるようになってから、登山が非人間的なプロジェクトになってしまったような気がする。山登りを、獲物のない狩りの疑似行為として、疎外された人間の肉体的精神的活動の解放として考えなおしてはどうだろうか。

農業革命、産業革命、科学革命を経て、人々のもつ生産力と情報量は大幅に向上した。だが、それによってヒトの人間性は向上しただろうか。

この問題を狩りをするサルの時点にもどって考えなおす必要があると考える。

1982.4～1983.3　山行総覧

山行No.	期日	山行名	パーティー
8201	4/	日和田山RCT	井汲、東山、松本(健)
8202	5/1.2	奥秩父 瑞牆山、カンマンボロン大洞穴ルート ＋一面岩 春一番ルート	井汲、宍戸
8203	5/1～3	会越 鬼ヶ面山～浅草岳	青谷、中野、河合、四宮、松本(健)
8204	5/16	西上州 荒船山 相沢川	森下、青谷
8205	6/13	丹沢 エビラ沢～社宮寺沢	松本、青谷、中野
8206	6/20	三ッ峠 四十八滝沢	中野、東山、松本(健)
8207	7/18	奥秩父 中津川 滝沢～深沢	森下、青谷
8208	7/	奥秩父 瑞牆山 カンマンボロン鎖形ハングルート	中野、井汲
8209	8/8	上越 巻機山 金山沢	森下、青谷
8210	8/	北アルプス 後立山縦走	東山、松本(健)
8211	8/19～21	東北 早池峰山 又一の沢～魚取沢	青谷
8212	8/22	上越 赤谷川 エビス大黒沢右俣	森下、松本
8213	8/29	奥秩父 東沢 東御	青谷、井汲
8214	12/25～1/2	ハケ岳 杁添川	青谷、宍戸
		天狗尾根～ツルネ東稜	青谷、中野、東山、松本(健)
		上ノ権現沢	遠藤、松本、東山
8215	3/27～29	東北 八幡平 スキーツアー	青谷 他

1983.4～1984.3 山行総覧

山行No.	期日	山行名	パーティー
8301	4/5～8	南アルプス 鋸岳～甲斐駒ヶ岳	宍戸 他
8302	4/29	日和田山RCT	中野、宍戸、東山、吉田、浜田、荻田
8303	5/1～3	上越 足拍子山 前衛スラブ	青谷、宮崎、浜田、荻田、吉田
		ダイレクトスラブ	中野、宍戸
		マイナーリッジ	青谷、浜田
		風穴スラブ	宍戸、宮崎、吉田
8304	6/17	谷川岳 一の倉沢 コップ重表ルート	青谷、宍戸
8305	6/	日和田山RCT	東山、吉田
8306	7/10	谷川岳 一の倉沢 二の沢本谷（中退）	青谷、宍戸、東山、吉田
8307	8/4～10	北アルプス 槍高岳 前穂北尾根	小川、青谷、宍戸、吉田、荻田、浜田
		三峰フェース 登高会ルート	青谷、宍戸
		滝谷 四尾根	宍戸、荻田
		三尾根～ドーム中央稜（中退）	青谷、吉田、浜田
		クラック尾根	宍戸、四宮
		一尾根	青谷、荻田
		前穂四峰 松高ルート	中野、四宮
		北条新村ルート	青谷、浜田
		前穂 右岩稜吉川～Aフェース	宍戸、吉田
		ドーム中央稜	中野、荻田
		ドーム北壁北西カンテ	青谷、東山
8308	8/14.15	谷川岳 一の倉沢 二ノ沢本谷	中村、遠藤、宍戸
8309	8/29	会越 守門岳 本高地沢（森下遭難現場確認）	中村、青谷、宍戸、四宮
8310	10/1.2	頸城 海谷 駒ノ川	遠藤
8311	10/1.2	上越 小出俣山マナホド沢～赤谷川	青谷、吉田
8312	10/2	丹沢 セドリ沢	荻田、浜田
8313	10/8～10	中央アルプス 宝剣岳～駒ヶ岳	宍戸 他
8314	10/14	日和田山RCT	吉田、山田

山行No.	期日	山行名	パーティ
8315	10/22.23	大台ヶ原～大杉谷	遠藤
8316	10/22～24	谷川岳 オジカ沢	青谷、浜田、吉田、山田
8317	11/2～4	足尾 湯ノ川～皇海山	吉田、萩田
8318	12/2	氷川 屏風岩 RCT	青谷、吉田、萩田
8319	12/	日和田山 RCT	吉田、山田
8320	12/29～1/3	八ヶ岳 赤岳主稜～南峰ロッジ	遠藤、山田
		三叉峰ルンゼ	青谷、東山
		ショルダー右ロッジ	中野、吉田
		石尊稜	宍戸、浜田
		裏同心ルンゼ	遠藤－吉田、宍戸－山田
		三叉峰ルンゼ	中野、浜田
		中山尾根	青谷、東山
		広河原沢 左俣	青谷－山田、宍戸－浜田
		右俣～奥壁	遠藤、吉田
8321	1/15.16	木曽 御嶽山	遠藤、青谷 他1名
8322	2/5.6	大菩薩 湯ノ沢峠	浜田
8323	2/14	日和田山 RCT	浜田、萩田
8324	3/28	天元台スキーツアー	青谷 他2名

1984.4～1985.3　山行総覧

山行No.	期日	山　行　名	パーティ
8401	4/8	鷹取山 RCT	松本(彰)、吉田、浜田、山田、西入
8402	4/13	上州武尊山 スキーツアー	青谷、山田
8403	4/30	日和田山 RCT	井汲、河合、吉田、浜田、西入、加藤 武内
8404	5/3～6	大源太山～足拍子	遠藤、青谷、浜田、萩田、吉田、 河合、西入、加藤
8405	5/13	小菅本谷	井汲、河合、吉田、
8406	5/26～27	愛鷹山	浜田、萩田
8407	6/17	椹谷	浜田、山田、西入
8408	7/1	コーモリ沢、三ツ峠	松本、青谷、西入、武内
8409	7/29	新茅ノ沢	萩田、武内
8410	8/10～18	小黒部谷～剣定着	遠藤、青谷、河合、萩田、吉田 浜田、山田、西入、加藤、武内
8411	8/22	氷川展望岩 RCT	吉田、山田、
8412	9/15～16	守門 大雲沢	青谷、松本
8413	9/24	西上州 物語山	青谷 他2名
8414	9/24	蓮峠～谷川岳	浜田 他1名
8415	10/7～10	大白沢 クロウ沢	浜田
8416	10/28	二子山	青谷、山田、武内
8417	11/1	日和田山 RCT	吉田 他、
8418	11/2～4	大室川谷～大黒茂谷	吉田 他1名
8420	11/22～25	天神平スキー	吉田
8421	11/26	日和田山 RCT	吉田 他
8422	12/28～1/3	八ヶ岳	
		横岳左俣～東稜下降	青谷、吉田
		横岳右俣下部	青谷
		天狗尾根～編笠山	浜田、加藤、西入、
8423	1/12～13	妙義　裏谷急沢	青谷、吉田

山行No.	期日	山　行　名	パーティ
8424	3/11	丹沢　石小屋沢	青谷、松本
8425	3/24	神楽峰ツアー	中村、青谷、西入、浜田
8426	3/18～20	至仏山　スキーツアー	山田、西入
8427	3/28	吾妻　人形石～西吾妻山往復	西入

1982年度　山行記録

1982年度　役員

会長 ---- 山野 裕
　　 岡田 徹
C.リーダー --- 松本 哲郎
　　 中野 敏彦
学生リーダー -- 宍戸 泰成
会計 ---- 中村 正俊
　　 宮崎 洋一
例会 ---- 四宮 健三
会報 ---- 青谷 知己
西高係 --- 河合 秀樹
　　 井汲 重弘

8202
奥秩父 瑞牆山
カンマンボロン中央洞穴ルート
十一面岩 春一番ルート

・1982年5月1・2日
・井汲重弘、宍戸泰成

カンマンボロン 中央洞穴ルート

このルートは昨年の秋、青谷氏と一度登ったことのあるルートであるが、岩の弱点をうまくつかんだ変化にとんだフリールートや、10m以上もあるような大ハング下の洞穴の出口をめざす人工トラバースの魅力にさそわれ、再びトライすることにする。最初の2Pは、暗く湿ったルンゼを登る。途中2ヶ所ほどあるチムニーは多少苦労するが、シュリンゲをうまく使えばいい。大ハングの真下からは、右上に見える小さな穴をめざしてトラバースぎみに人工で登っていく。ここがこのルートの核心部で、かぶりぎみのトラバースは、ハングのスケールと暗い中での高度感で上下左右の感覚がおかしくなるようだ。やっとのことで穴を出ると、突然明るくなり、外の景色が気持ちいい。ここから1Pはチムニーを体を十分につっぱりながら真上に直上する。最後の1Pはちょうどいい具合に打たれたボルト連打の中を人工で登り終了。正明には十一面岩が大きく前をふさぎ、モアイフェース、大ハングがよく見え快い。

十一面岩 春一番ルート

今日は昨日のカンマンボロン頂でよく見えた十一面岩にアタック。取り付きは大ハング右5mほど巻いた所にある。3mほど直上するとハングにぶつかる。体をいっぱいに伸ばしても上に届くか届かないかで結構、苦労させられた。やっとのことで乗り切り、しばらく直上する。その後左に10mほど人工トラバースが続き、1P目が終わる。その後2Pで白熊のコルに出るが、先程から降っていた雨が激しくなり、と同時に1P目に時間がかかりすぎたため、上に登るのをあきらめ大ハング上から空中懸垂下降する。

カンマンボロン 鎌形ハングルート

昨日からの雨の中、最終日ということで、取り付きまでではという気持ちでアプローチする。1P目は大ハングルート左5mほどの所から人工で登る。大部人工に慣れてきたため40mいっぱい気持ちよく登りテラスへ。真上に見えるハングは意外に大きい。ハング下までの1Pは人工とフリーとの混合で微妙なバランスが要求される。ハング左にシュリンゲがあったのでそこを目ざしたが、それが大きなミスでルートを誤ったようだ。右にトラバースして横からかぶりぎみにハーケンを打ちながら乗り越えようとした瞬間、1本ハーケンが抜けるが、あやうく難をのがれた。敗退!!

（井汲記）

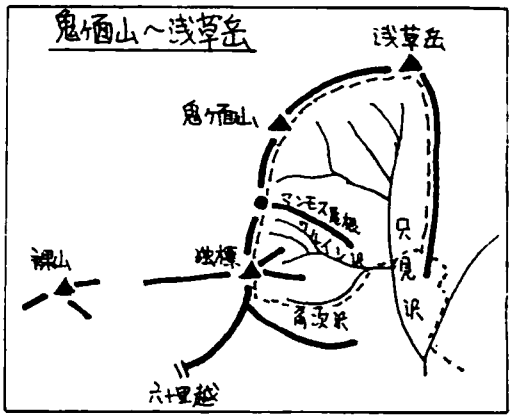
<大ヤスリ岩 1P目 56'10 >

8203
会越 鬼ヶ面山～浅草岳

・1982年5月2日～3日
・青谷知己，中野敏彦，河合秀樹
四宮健三，松本健司

例年、5月山行は上越周辺の岩場で行なっている。足拍子周辺、ジロト沢周辺に引き続き、鬼ヶ面山東面を対象にしてみた。
2日目ワルイシ沢周辺の尾根または、沢筋をルートにする予定であったが、終日ブロック雪崩が頻発しているため、それらのルートは放棄した。今年は雪が少ないためかワルイシ沢も上部で切れている。角次沢の急な雪渓を雪訓しながらつめて、縦走路を一周するだけに終わった。鬼ヶ面山東面は、みるからに悪相の岩質で垂直部分も多く、快適な登攀は望めそうにないように思う。
（青谷記）

上越線小出で只見線に乗り換え、田子倉で下車。線路脇の休憩所前の広場に幕営する。そこで、中野、四宮、松本は一般路只見尾根から浅草岳へ、青谷，河合は裸山偵察のため、鬼ヶ面山南峰～六十里越に行く。その晩は夕方つんだ山菜を料理して食べる。
翌日、晴天の中を鬼ヶ面・浅草岳へ向かう。只見尾根からの鬼ヶ面山東面のながめが素晴らしい。ここからすべり落ちるように只見沢に降り、一気に雪の斜面を登り、南峰に登り、足元が切れ落ちた道を北にとり、鬼ヶ面山を抜け、上下を繰り返しだだっ広い浅草岳の稜線に出てしばらくして山頂につく。山頂からは360°の眺望に恵まれ、守門岳、飯豊連峰、田子倉湖や荒沢岳、越後三山がつらなっている。また、直前に鬼ヶ面山が荒々しい岩壁をみせている。下山は昨日中野らが偵察した只見尾根をかけ降り、夕やみせまる只見沢におりつく。
（河合記）



8204
西上州 荒船山 相沢川

・1982年5月16日
・森下道夫，青谷知己

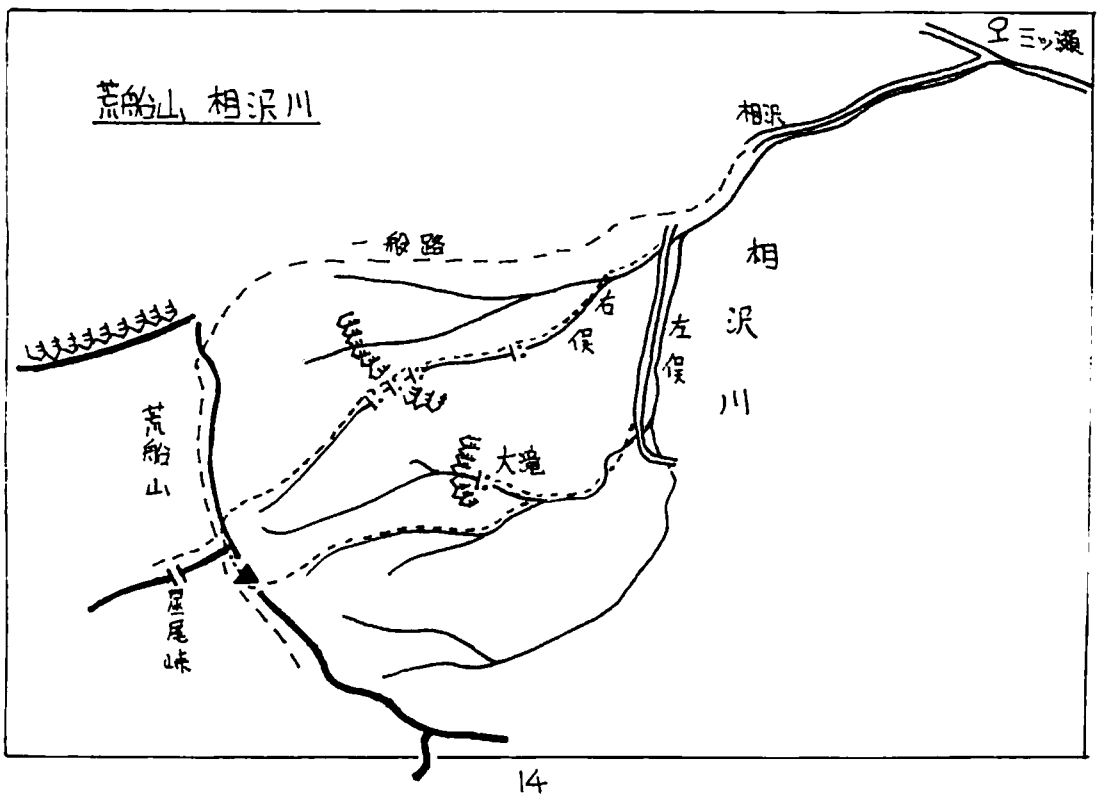
1度行きたいと思っていた西上州。森下さんに誘われるまま荒船山東面の相沢川へ入る。ここには以前毛無岩方面から巨大な氷瀑が見えたことがあるといい、その幻の大滝をみつけようというわけである。
相沢の集落を見送ってしばらく林道を行きまず右俣に入ることにする。しばらく河原が続くが、次第にナメ気味になる。右折すると15m程の立派な滝に出会う。左手より越える。しばらくすると水流がぱったりと消え、どうなったかと驚くが、しばらく進むと水流が現れ連瀑帯となった。最初の滝は30mの斜瀑。水流が逆光にはえ、新緑もまぶしく輝いている。右側よりハーケンを打ちつつ直登。つづいてチムニー状の10m前後の滝が連続する。左岸沿いに越えるが、これら一連の流れが大滝に見えそうである。まもなくおだやかな流れとなり、ジャブジャブたどっていくうち、荒船山の一角にとび出した。西上州の山々が春霞に煙り、岩峰群があちこちに顔を出している。宮堰山頂で一服ののち、左俣へ下ることにする。さて地図を開くと、山頂には顕著な岩記号が連続し、そこに一連の

大滝が懸っているようである。中央の沢はまさにその岩記号にかかっている。下降は未知数なので、より右手の沢よりその部分へ登ることにする。ブッシュ帯を見当つけて急降すると沢筋に出る。測量の標識もみえ、まもなく沢沿の踏跡へ出た。沢筋は単調そうなのでこの踏跡をたどると左手より急な水流が落ちてくる。この沢の上流が大滝(??)と勇んでつめていく。急なゴーロをたどると、15m程の滝を従えて巨大な岩はだが見える。はやる気を押えて登ると、果たしてはるか天上より氷流が落下してくる。まさに100mはあろうという大滝である。しばしあぜんとして見上げる。冬季氷結すれば、みごとな氷瀑となるであろう。写真をとり満足して下る。踏跡をたどると次第にはっきりとした道になり、林道に出た。

のちにこの相沢周辺の氷瀑が岩と雪(97)?で紹介されたがこの滝をさすのであろうか気になるところである。ぜひもう一度冬季に訪れてみたい。

(青谷記)

〈相沢川左俣 まぼろし(?)の大滝〉



8205
丹沢 エビラ沢～社宮寺沢

・1982年6月13日
・青谷知己，松本哲郎，中野敏彦

久々のメンバーがつどったので車で沢登りと、丹沢の沢に向かう。丹沢はツメが赤土で沢も美しさに欠けるとあってどうも敬遠気味であったが、神ノ川流域は初メてである。出合で仮眠し沢に入る。出合の滝はなかなかの美しさで、左壁に沿ってしばく直登する。苔むした感じのよいゴルジュを抜けると広く開ける。いくつかの滝をやりすごすと2段25m滝。この滝も感じがよく左壁のピトンに沿ってアブミで直登する。程なく大棚に出る。右側を直登。上段は松本が苦労しつつも中央を登ってしまった。固い深成岩系の岩床を快適に越えていくと例のツメとなる。赤ザルを右往左往しつつ稜線へ抜ける。高校時代以来のなつかしい山稜であった。

神平山を経て、適当に社宮寺沢めがけて下降する。上部は洞れた荒れたルンゼ状であるが、何ということもなく下降し、やがて水が出てくるとゴーロ帯となる。単調なゴーロ多きと、大きな堰堤を見送るうち出会いの林道に至った。

滝登りは充実していたものの、何となくぱっとしない沢登りであった。

（青谷 記）

<エビラ沢　2段25m滝の人工登攀>

8207
奥秩父中津川 滝ノ沢～深沢

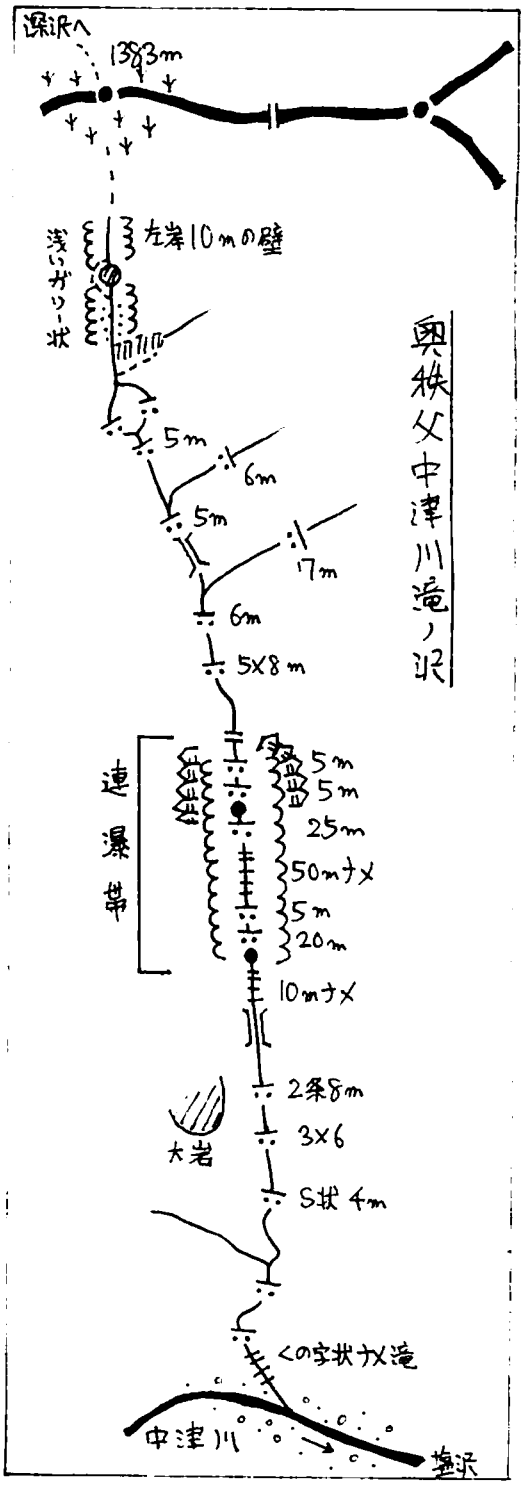
・1982年7月18日
・森下道夫，青谷知己

この沢は、中津川塩沢の村上流約500mに左岸より中津川に沿ぐ沢で、沢名は不勉強のためわからず、ここでは滝ノ沢と呼んでおく。

下流にある連瀑帯は、水流に洗われた見事なもので直登するのにはかなりの困難を伴うと思う。中流は、緑濃いはざまを井戸水のように溪流がほとばしり、いつつ小滝を楽しく登って行く。下降路に選んでみた上流の深沢は山道がついており、落合付近の大滝は荘厳な趣きがあった。

（森下記）

〈巻機山 金山沢 40m 滝〉



わらじ 年報6 より 転載

8208
奥秩父 瑞牆山
カンマンボロン 鎌形ハングルート

・1982年7月

・中野敏彦，井汲重弘

カンマンボロン 鎌形ハングルート

5月に敗退したため再びアタック！ 1P目40mの人工でピナクルへ。2P目の微妙な人工・フリーの連続の後、ハングにかかる。ハング下のボルトにアブミをかけると体は宙にゆれ実に気持ち悪い。思いきり体をのばし何度かのトライでやっと乗越すことができた。ハング上のフェースを5m程登った所で1Pが切れるが、アブミ確保となる。その後1Pで大テラスに出、一呼吸できる。そこから1Pはクラックと人工が続き、実に悪いフェースを左にトラバースしてルンゼへ。最後は頂上の岩を回りこむようにして反対側から頂へ出て終了。一回失敗したルートだけにハングを越えた時の気持ちは最高だった。暗い夜の中、十一面岩側へ。途中2度程懸垂下降してテントに着いたのは11時だった。
・・・・疲れました。

大ヤスリ岩

本日は岩遊びをかねて、大ヤスリ岩を登ることにする。この岩はその名からもわかるように、真直ぐにヤスリのようにそびえ立っていて、見る分には実に気持ちがいい。1P目は裏側のチムニーを人工を交えて登る。2P目で大ヤスリの基部に立ち、最後は40mの快適な人工登攀である。頂上からは目の前に瑞牆山、遠くに八ヶ岳、アルプスの山々が一望に見渡せる。

（井汲記）

8209
上越 巻機山 金山沢

・1982年8月8日

・森下逸夫、青谷知己

今年の西朋は、意見や日程が合わず、夏合宿が消滅してしまった。そこでもの足りない気持ちを埋め合わせるべく、手頃な、しかし、ちょっと以前ようひっかかっていた金山沢をめざした。同じ巻機山でも隣のヌクビ沢や米子沢は有名だが、この沢は案外知られていない。

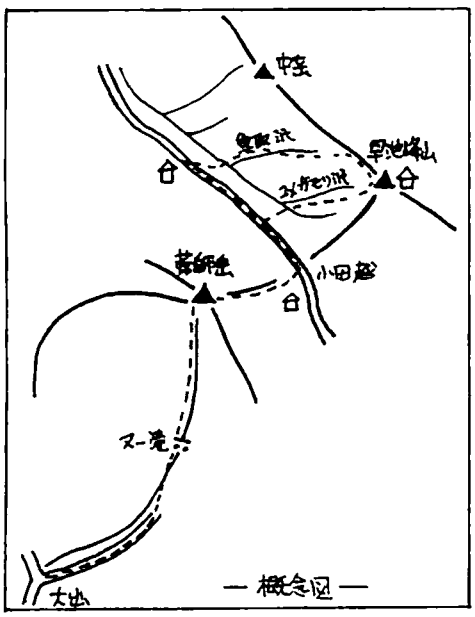
8月8日（くもり）

一番バスで入口下車。まだ明けきらぬが、夜明けするのも中途半端なため歩き出す。しばらくゴーロをたどり、荒れた感じのする大岩の間をくぐりぬけていく。右岸には広大なスラブ壁が現れる。釣師を追いぬいてしばらくすると小滝状の滝が連続し快適である。黒岩沢を見送って左折するといくつかの滝ののちに大滝がかかる。深い釜と岩壁を2つに截く40m滝で圧倒的だ。左岸より高巻くとオースラブ帯に導かれる。ここはノーザイルで快適に登る。続くオニスラブ帯からはザイルを出して登る。上部はルートが難しく、右手の岩場をぬうようにして登り、落口右手のブッシュに到達する。ここを抜けるときれいな小滝が連続するが、特にポイントはなく、しだいに水流も細る。最後は予定外のヤブコギをして剣引岳頂上へ抜けた。大滝や広大なスラブ帯があるものの、いまひとつ洗練されていない感じの沢であった。

（青谷記）

8211
東北 早池峰山 魚取沢ミルンゼ 薬師岳 又一の沢

・1982年8月19日～21日
・又一の沢　青谷知己 単独
　魚取沢ルンゼ　青谷知己 他3名



あこがれの早池峰山。エーデルワイスと神奥の里。今春、映画「早池峰の賦」を見るにつけ思いかつのり、小規模ながらもバリエーションルートをたどって早池峰山に登ることにした。

8月19日（はれたり雲ったり）

前日までの奥羽山地でのツキノワグマの観察（結局実物は見れずじまい）を切り上げ、1人早朝の盛岡を起つ。民話の郷里「遠野」で下車。バスは本数がなく、大出までタクシーを飛ばす。南部の曲屋、タバコの葉が新鮮だ。大出には早池峰神社がある。傾きかけた社殿に歴史の重みが用にせまってくる。又一の滝までは林道が続く。北上の最果、牧場風景を見ながら、一人とぼとぼ歩いていく。又一滝は花コウ岩の一枚岩。ここで一般道は山に分け入っていくが、高捲いて沢に入る。

沢床はナメ気味で小気味よい。しかし、前日までクマ見物をおそるおそるしていた身には、何ともいい知れぬ緊張を感じて、思わずワーッと叫びたい心境である。（実際叫んでいた）小滝をいくつか越し気持ちよくピッチをあげていく。サワヤブがうるさくなると二股、右股は滝で落ち込んでくる。左俣に入ると、いよいよ水流は減りクボ状になる。やがて水も枯れ、ヤブコギとなり、小一時間で稜線に抜ける。ハイマツとアオモリトドマツ。そして、花コウ岩の露岩と美しい。薬師岳の頂上には雲間からのぞく太陽と霧が交錯する世界で、時折り見える早池峰の稜線ははるかに高い。1人占めしていた頂上に長　をする。隅の傾くころ小田越めざしかけ下り、夕陽に輝く早池峰をあおぎつつ、ひっぱに通じた林道をうすゆき山荘に入る。管理人のおじさん1人。タタミの板間で1人寝ころび、25回目の誕生日を祝う。

（遠野 810 — 大出 835～50 — 又一滝 1025～35
— 薬師岳山頂 1340～1600 — 小田越 1640
— うすゆき山荘 1800）

8月20日（晴れ）

車で入ってきた4名と合流し、1人は小田越から高山植物を撮りながら山頂へ。寝坊が始めてという連中をつれて、わらじにきゃっきゃしながら魚取沢に入る。下部は平坦なゴーロながら、天気も良く実に楽しい。堰堤を2、3やりすごすと小滝を現れる。真白な大理石のナメがすばらしい。大きな堰堤を左から巻くと、がしが広がりゴーロとなる。左岸よりミルンゼが落ち合うとしばらくでミルンゼがクボとなって合流する。右岸の台地にあがると、上部のルンゼ群が一望でき、早池峰の稜線に向って6つのルンゼが確認できる。昼食後、最も顕著なるルンゼに入る。しばらくゴーロ状だが、次第に岩壁が露出し、階段状となる。S字状に屈曲しながらどんどん高度を上げる。水流はごくわずかである。スラブ状やチムニー状の岩はがっちりしており、かけ登る。初心者の連中もおっかなびっくりついてくる。やがてルンゼも分岐し、傾斜もゆるくなってお花畑とハイマツ帯に入っていく。夏も終わりのこの時期でも、ハヤチネウスユキソウや、ナンブトラノオらが実にかれんに咲き誇っている。踏みつけを気にしつつ稜線の登山道にコケモモやガンコウランの実をほおばりながら抜ける。今夏は人気の早池峰山だというが、このルート

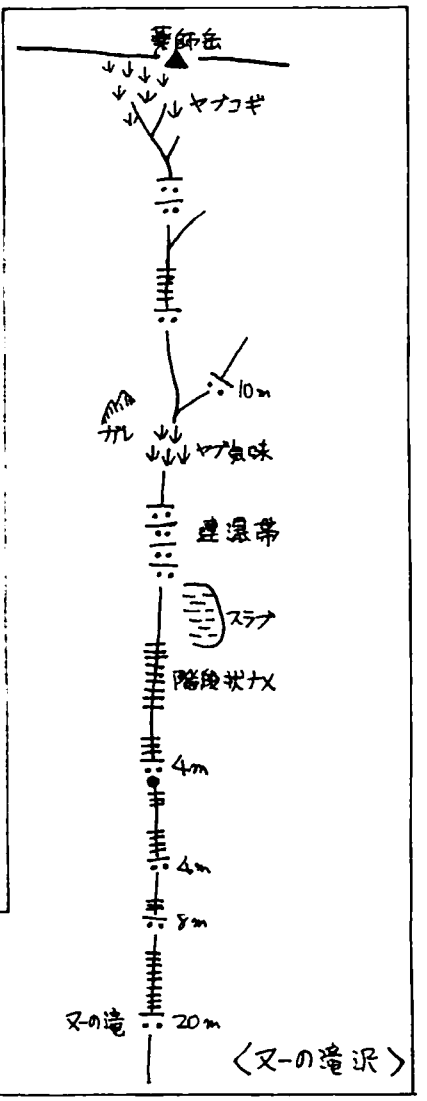
はまず人に会うことがない。静かな山懐に抱かれた1日であった。頂上はジャモニ岩の積み重なった岩塊の中にある。信仰の山 早池峰。頂上には奥社があり、剣が立つ。あこがれの早池峰に感激ひとしおである。夕方より雷雨。頂上小屋に泊まる。

（急取沢出合 1040 ― 掘提 1200～1010 ― 3ルンゼ出合 1230～1315 ― 頂上 1600）

8月21日（晴れのち霧）

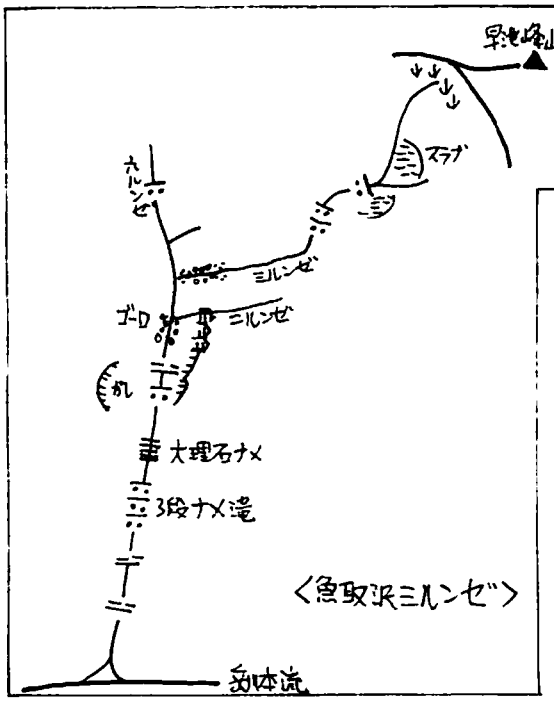
早朝晴れていた空も霧につつまれる。のんびり一般道を高山植物を探しつつ下る。いい株をみつけてはじっとみまもるが、なかなかむづかしいものがある。今日は多くの登山者が登ってきている。コメガモリ沢にはさまれたがレキ道を下れば沢でいとなり、登山口に出る。荷物を早速まとめ、車で小田越を越え、次の目的地 岩泉の鐘乳洞、そして、北上最奥の地 安家へ向かった。安家は「あっか」と呼び、林業と肉牛飼育で生計をたてる本州のチベット、北上山地の山深いところにある集落である。そこの子供達の小学校の庭で泊り、また一緒に牧草地で遊んだ楽しい思い出は早池峰山行とともに忘れ難いものとなった。

（頂上 800 ― 登山口 1035）



〈又一の滝沢〉

（青谷記）



〈急取沢ミルンゼ〉

8213
東御築江沢左俣

・1982年8月29日
・青谷知己、井汲重広

8月29日

有名な東沢流域の沢において、知る人ぞ知る困難な沢としてこの東御築江沢がある。登山体系にも美しいフリークライミングのルートという形容が付されており、気になっていた沢の1つであった。

乙女ノ滝の下流200mぐらいのところに左岸から落ちてくるスラブ滝がその出会いである。身づくろいをして取付く。出会いの滝は水流の中のクラックをひろって快適に登る。そのままつるべで3P程連続するナメ滝を越えると二段。それぞれナメ滝で合流する。左俣に入ると10m程の滝を1つ越え、ゴーロ状のところをしばらく進むと問題の大滝に出る。下段は傾斜があり、水流のすぐ左に取り付くがかぶっていて越せず、10m俣左の草付の凹角からまいていくと落口のレッジに達する。2段目は細かいスタンスを拾って流れをわたり、右の凹角沿いにルートをとるが、緊張する。さらにスラブをフリクションで登りピッチを切る。3段目はスラブより水流右手の逆層のスラブにルートをとるが、傾斜も増し、2本程ピトンを打って進むが、リスもスタンスもみつからず退却する。しかたなく右側をブッシュづたいに高巻くが、これも降り口が実に悪かった。この大滝で5P。相当時間を費やし、また、気力も消耗させられた。更にいやなスラブを登りつめていくと、ルンゼ状になり、濡れたホールドに気が抜けない。いやになるころルンゼも浅くなり、急なブッシュを最後に踏跡のある尾根に出た。この沢は最初から最後まで気が抜けず、東ノナメ沢などよりも数段困難に感じられた。遅い昼飯をとり、鎖冠尾根を注意しながらかけ下り、夕暮れせまる本流に出て、やっと解放感に浸ることができた。

(青谷記)

<大滝2段目上部を望む>

8214
八ヶ岳 冬合宿

ここ数年、学生会員の減少もあって、全としてまとまりのある冬合宿はおこなわれていなかった。そこで、八ヶ岳でも新鮮な場所である東面で集中山行を行なうこととした。パーティは日程の都合上分散したが、それぞれ充実したルートを完登することができた。西朋としても社会人の実動メンバーが増えるにつれ、長期縦走形式の合宿はなかなか難かしい。ありきたりでない定着形式の山行ができるところとして、八ヶ岳の東面はもっと見直されてよいだろう。

(青谷記)

・1982年12月25日～1983年1月2日
・青谷知己，中野敏彦，遠藤彰
松本哲郎，宮戸泰成，東山頭
松本健司

松涙川 鉾岳沢

・青谷，宍戸

12月26日（雪）

南沢出合 915 ― 鉾岳沢出合 1255～1330
― B.P. 1510

風雪吹き荒れる野辺山駅よりタクシーで西武自然塾に入る。車がスリップしだした所でストップ、人っ子一人いない別荘地に放り出される。左手の河原に降り南沢に入る。しんしんと雪の降る中、単調なゴーロをたどる。堰堤をいくつか過ぎるとやっと緩線がせまり、鉾岳沢の出合いとなる。寒さに昼食もそこそこに沢へ入ると、左右の壁がせまいゴルジュ状を呈してくる。左折すると見事な青氷が目に入る。天気も良くないのでとりあえずこの辺でビバークして登ってみるかということにするが、15m程の青氷は右手からの支流で、左にF1が緩傾斜で落ち込んでくるのがわかる。これは登れるということで青谷トップで取付く。上部でツララ状だが倒木を利用して越す。上部はせまったゴルジュとなり左手に絶好の岩穴をみつけてビバークとする。

12月27日（快晴）

B.P. 715 ― ゴルジュ上 825 ― 緩線
1615 ― 赤岳石室 1645

朝起きると、狭いゴルジュの空は真っ青、意気が上がる。雪に埋まったゴルジュをラッセルしていくが、宍戸が疲れた筈に落ちそうになる。つららのかかった側壁が美しい。右折するところでチョックストンのある 10m程の氷瀑がかかる。傾斜があるが快適に越える。さらにラッセルを続けるとゴルジュの出口。雪が多く、上部3m程氷が出ている。雪にもがきつつ越えると上部は明るく開ける。夏期はすべて池帯だが今はすべて埋っており、苦しいラッセルとなる。二俣手前でゆるい氷が出ている。左俣に入ると傾斜が強まるが氷はやはり雪の下。奥の二俣より右俣は濡れたハング滝。左に入るとみごとな青氷が顔をだす。これを1ピッチ登ると沢も浅くなる。ラッセルは技術もなにもないようだが、宍戸をどんどん離して登ってしまう。左手の尾根へはい上がると、眼前に赤岳が気高くそびえて美しい。緩線は真近だが上部は草付の壁となっており、夕暮れに迫われるようにザイル2Pのばすと鉾岳の一角にとび出した。夕やみに迫われ真っ白になって赤岳石室にたどりつく。小屋のストーブやコタツは何とも異和感を感じてしまった。

12月28日（晴）

石室 645 ― 赤岳 715～30 ― 天狗尾根小岩峰下
915 ― 赤岳沢出合 1115

小屋一番で出発。風が強いがすばらしい展望が開けている。予定では昨日のうちに真教寺尾根を下るつもりでいたが、下れないこともなかろうと天狗尾根を下ることにする。ポイントは大天狗の巻き道から数メートルの岩場の下りと、30m岩峰のトラバースだが特に困難は感じなかった。稜心部はあっけなく終り、樹林帯から赤岳沢側へ下る。赤岳沢出合にたどりつくと、中野・東山・松本が氷の練習に出るところであった。宍戸はここで下山。

今日の午後は氷の練習に続き横岩沢右俣に入ってみる。5mの氷瀑を楽しく越えると正面ルンゼに垂直な氷瀑がかかる。さんざんしぶったあげくクリアして3人をひきあげる。上部の氷で遊ぶうち時間切れとなり引き返す。

天狗尾根

12月29日（晴）

新人2人を含め4人。どこを登るか迷った末、また天狗尾根を登ることになってしまった。痛いヒザを引きずりつつ、ついていく。例によって30m峰を大天狗でザイルを出した以外何ということもなく稜線に達する。ここ数日天気もよく、雪もすっかり消えている。3人は赤岳を往復。こちらは日向ばっこ。キレット小屋を越えツルネの肩に幕営。

12月30日（くもり 時々雪）

視界悪く、風も強いが横岩にアタック。横岩手前で一部悪いが、長いハシゴ段も慎重に登れば難なく頂上へ至る。早々にとって返し撤収してツルネより東稜を下る。悪所に赤布があり、問題なく谷底におりたつ。出合い小屋に

戻り、松本・遠藤とおちあう。青谷は下山する。

上ノ権現沢

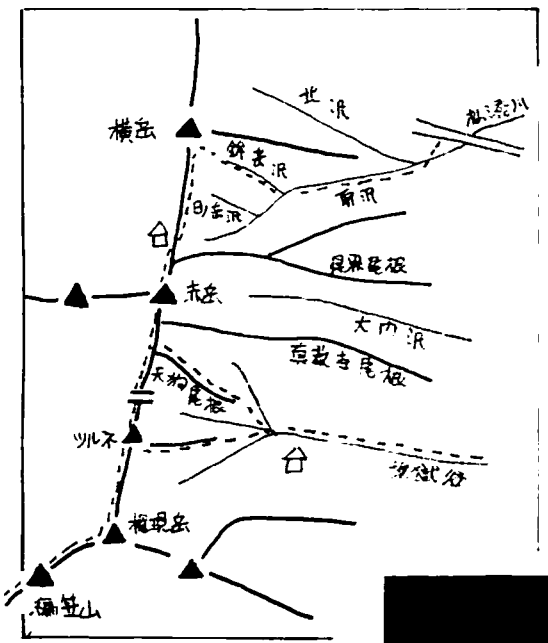
・12月31日
・松本，遠藤，東山

ツルネ東稜

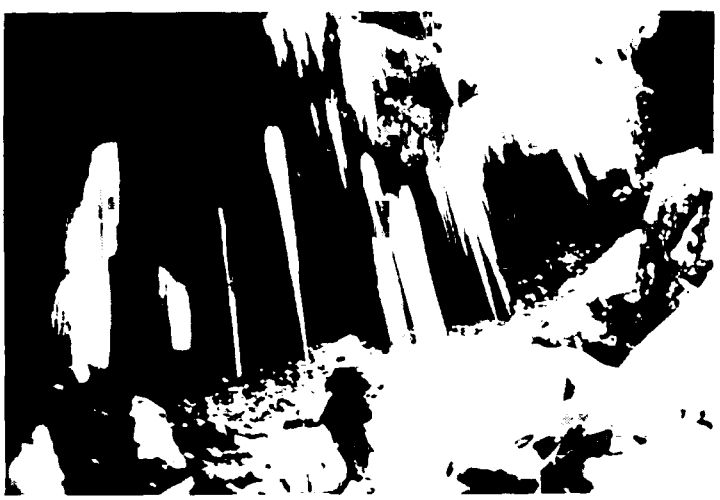
・1月1日
・遠藤

（青谷記）

<八ヶ岳東面概念図>



<鉾岳沢 ゴルジュ 出口>



<鉾岳沢 下部ゴルジュ>

8215
東北 八幡平スキーツアー

・1982年3月27日～29日
・青谷知己　他5名

3月27日

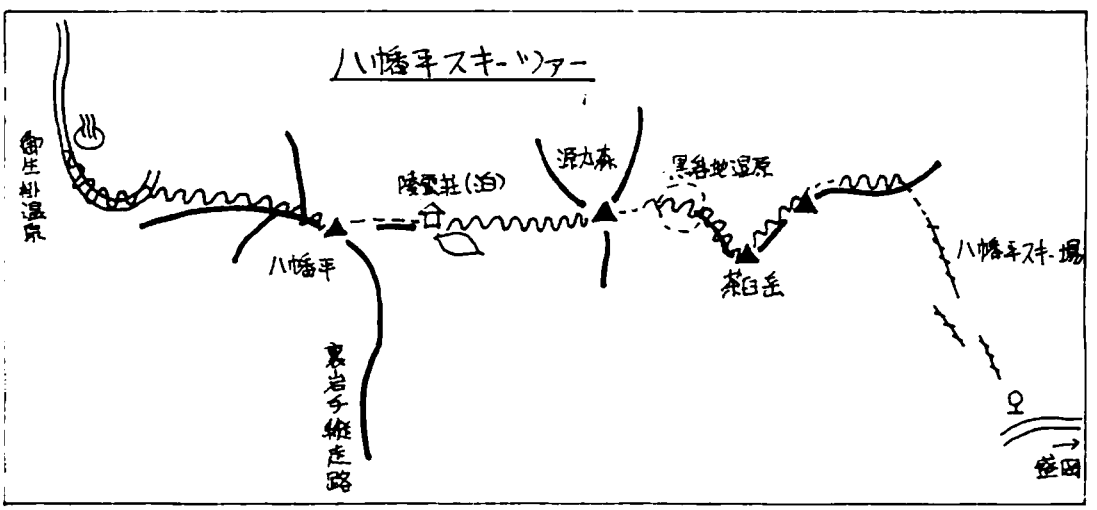
盛岡在住の友人が、八幡平で結婚ツアーをやるという。このイキなスキーツアーに急きょ参加することになった。上野を夜行で発ち、盛岡にて合流。バスにて八幡台スキー場に入る。天気はよく、静かなゲレンデのリフトを乗継いでいく。雄大な岩手山を望み、八幡平へのびやかな稜線が続いている。茶臼岳まではゲレンデスキーヤーも多く、シールをきかせてひと登りである。春間近の木々の白ひがうれしい。黒谷地湿原まで直滑降、再びシールをつけて源太森へ登り返す。源太森は広大な溶岩台地の小突起だが、秋田～岩手の山々がすばらしく見渡される。八幡平は夏でこそ、アスピーテラインにより観光客が押し寄せるが、雪で閉ざされたこのシーズンは歴史の静けさをとり戻す。陵雲荘が雪原と変わった八幡沼の横にポツンと姿を見せている。早いが今日の目的地である。この小屋は解放されており、非常にきれいで、中央にストーブ、地下にマキと至れり尽せり。周辺の岳人の手入れのよさには頭が下がる思いだ。さっそく小屋の前で6人だけの結婚式をあげる。ミクロ度、苦労して背負ってきたケーキのカット、乾杯！楽しい夜が更けた。

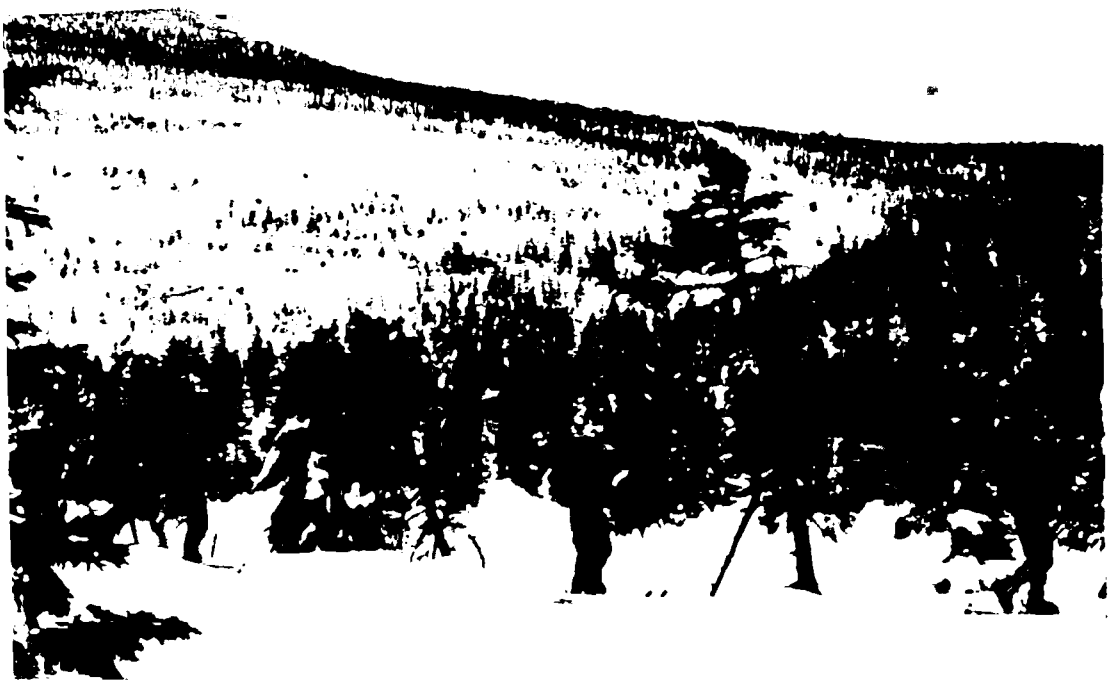
3月28日

今日も快晴、八幡平山頂を形成する大雪原を横断に従ってスキーを滑らせる。遠く森吉山がみえる。周囲は未知の山ばかりだ。光あずきや果物を食べながらの気ままなスキー行。下りは横断に従って樹林帯へ突入、こけつまろびつ樹林をぬってすべっていく。アスピーテラインに出て気持よく直滑降していけば硫黄の臭い漂う温泉場だ。今日のフィナーレである。御生掛温泉、木の風呂、オンドル風呂、もちろん混浴。まさに八幡平ならではの大満足大会であった。

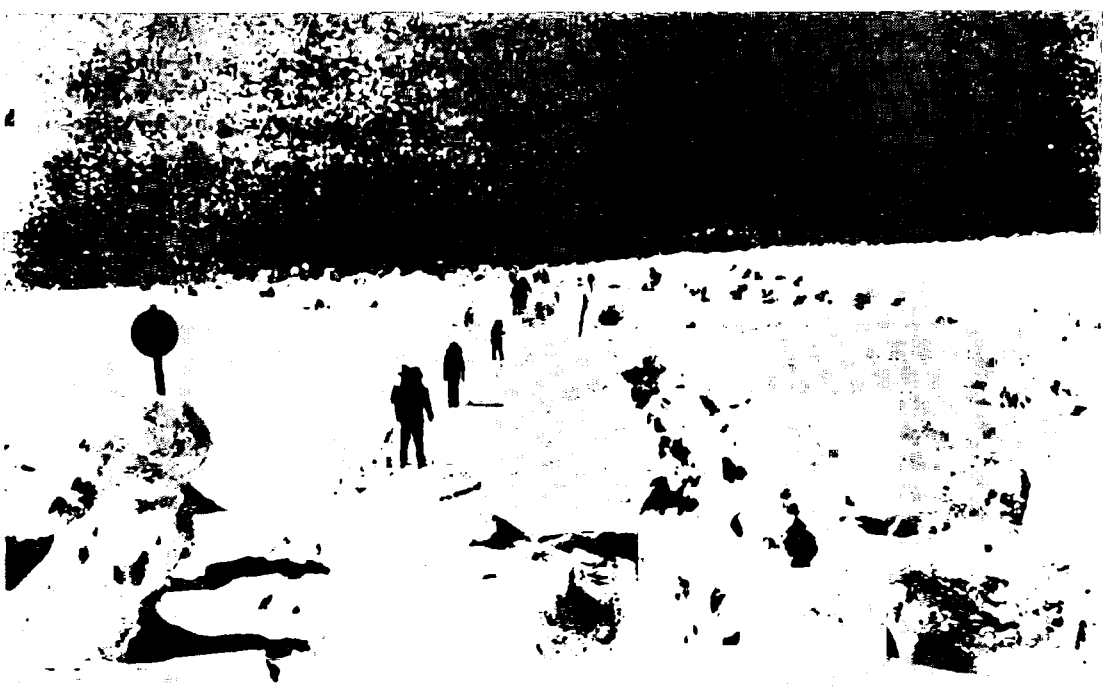
バスにて八幡平駅、盛岡にてわんこそばをたらふく。翌日網張スキー場でひとすべりして帰京した。山スキー＆温泉。この魅力にとりつかれてしまいそうである。東北の個性ある未知の山々にものんびり出かけてみたい。

（青谷記）





〈茶臼山より 源太森へ〉



〈八幡平の大雪原をゆく〉

1983年度　山行記録

1983年度　役員

会長　-----山本 泉
C.リーダー ---青谷 知己
学生リーダー--宍戸 泰成
西高係 ---中野 敏彦
総務・会計--東山 頭
記録 ----四宮 健三
例会 ----松本 健司

8303

5月合宿（上越足拍子山）

今年度は新人も多く入り、新人の養成が急務である。当初、上越方面として谷川岳東尾根～蓬峰～足拍子山周辺という計画であったが、谷川岳東面は登山禁止のため、足拍子本谷定着合宿となった。荒沢～足拍子周辺の岩場は、隠れた存在であり、残雪期はアプローチも短縮され取付も容易である。3年前の合宿とあわせ、ほぼ主要なルートをトレースすることができた。

初日はスラブ2本をつめて綾線で合流中野、萩田下山。2日目、天候がはっきりしないため、風穴スラブ周辺で雪訓。青谷は足拍子本谷を綾線までつめた。3日目、2ルートを登り下山。各ルートからの下降は、すべて前手沢にとった。

- 1983年5月1日～3日
- 青谷知己，中野敏彦，宍戸泰成
  宮崎洋，萩田哲也，吉田浩之，浜田和康

五月連休は新人トレーニングとして、雪訓や岩登りのできる候補地探しでいつも頭を悩ませている。今年も谷川東尾根を計画していたが、登山解禁されず、2年前行った足拍子周辺とした。

他の登山者を見ることもなく、自分たちだけの岩登りや雪訓ができる場所として貴重である。タクシーで山ノ神の奥まで入り、一時間弱で経木ノ沢出合の杉林にベースキャンプをおく。ここより各ルート取付まで一時間程度である。

5月1日

前衛スラブ　（青谷，吉田，浜田）
　　（宮崎，萩田）
ダイレクトスラブ～中央ルンゼ
　　（中野，宍戸）

前衛スラブは本谷雪渓より下部の小滝を快適に越え、スラブ入口の滝よりアンザイレン。新人のトレーニングとして傾斜もゆるく楽しめる。前衛スラブの頭まで8P程。II～III級。ダイレクトスラブでは、パーティが充実していたため、特に困難もなく荒沢山にダイレクトにつきあげ快適だったとの事である。

主稜線で3パーティ合流後、中野－萩田は前平沢のコルより荒沢の雪渓を下る。他は前平沢よりベース地へ。一部雪渓が切れているが、慎重に下れば特に問題はない。ところで前の2人は、大滝にはばまれて下れず、とって返して稜線を中里へ下ったらしいが、この日のうちに帰宅できなかったとは…悲惨な話であった。

5月2日

天気もパッとせず、風穴スラブ下の雪渓で雪訓とする。キックステップ・確保・コンテとひと通りやる。適当なところで切りあげ。青谷は本谷雪渓をひとり稜線まで往復する。

5月3日

風穴沢マイナーリッジ（青谷，浜田）
風穴スラブ　　（宍戸，宮崎，吉田）

風穴沢マイナーリッジは、風穴沢雪渓をつめ、大滝の手前左手にのびるリッジで、雪渓より恐竜の背のようにせりあがっている。右手にメインリッジを望みつつ、快適にカンテ登りである。終了点は10mの懸垂下降、風穴の大穴のすぐ下である。快適であったというが風穴スラブパーティと合流し大休止。巨大な風穴は左手のブッシュ伝いに2Pで抜ける。稜線より前手沢を経てベース地へ。

――MEMO――

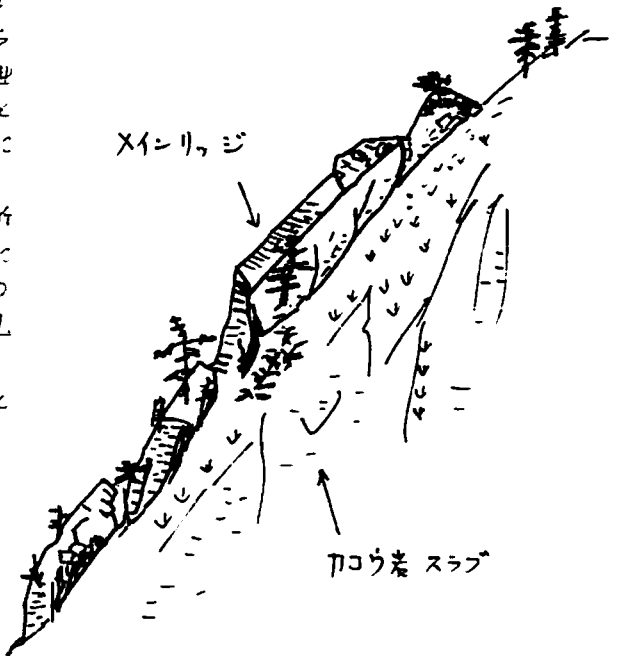
記録を書く時になってもう少し研究しておくのだったと思うが、地学的興味と登攀活動は常に意識していないと両立はむずかしいらしい。

さて風穴沢の2本のリッジを写した写真や状況を思い返してみると、いかにも周囲の花こう岩系のスラブとは異質である。そこで

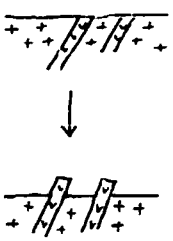
考えられるのが、貫入岩体（いわゆる岩脈）ではないかという事だ。（図参照）そういえばマイナーリッジの岩質は、ブロック状の節理やギャップ部分での板状節理・もろさなどが目立った。メイン・マイナー両リッジは、2つの平行した岩脈であろうか、その結論である。こういった例はゲレンデなどにも見られ、例えば子持山屏風岩などはその典型である。岩石名は粗岩などでなかったかと思われるが、次回訪ずれたときに明らかにしよう。

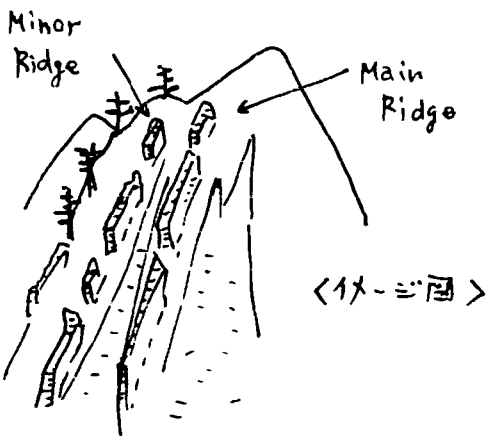
一般の地質家がなかなか行けない所に山屋は出かけていくわけで、地学にたずさわる私としては、沢や岩場もその気になって観察すれば、いろんなことが見えてくる。少し"登る"ばかりにがむしゃらでなく、発想を柔軟にしていこう。と思うのだが……

（青谷記）



前衛スラブの頭より見たメインリッジ
（青谷図）





<イメージ図>

8304
谷川岳 一ノ倉沢コップ
雲表ルート

・1983年6月17日
・青谷知己，宍戸泰成

コップは左岩壁で敗退の憂き目にあっている。夏用では誰も登っていないし、たまには谷川の岩場をのんびりやるかということで宍戸をさそって出かけた。

天気はさえず、衝立前沢を登り始めて雨降り。しかし、せっかくきたからと登り始める。略奪点あたりは雪渓が多く苦労する。コップスラブの右端に沿って一気に取付へ至る。岩はぬれているが雨もあがったので取付くことにする。1P目ラバーソールでは3級なんて書いてあったが、運動靴では滑べりそうでかおいにちゅうちょする。ハング登りは宍戸におまかせというわけでゆっくり見物。ついこの間フリー化されたというわけだがまあよくやるわいと、こちらはアブミ遊泳。完全なハングでもなく、初登の記録当に思いをはせつつ足下にする。3P目はぬれた草付のクラック、思わずピトンをつかんでしまう。ここをやりすごすと砂石ルンゼめざして緩傾斜の岩場をたどるだけだ。

久々の一ノ倉沢の景観を楽しみつつ、南稜を下る。今回は出合まで車で来ている。戸口から取付まで何とも安易なアプローチ。これになれてしまうと恐ろしい。

（青谷 記）

一の倉沢

8306
谷川岳、一の岩沢 二の沢本谷（中退）

・1983年7月10日

・青谷知己，宍戸泰成，東山顕
吉田浩之

7月10日（くもり時々雨）

夜中に出合まで車で乗り入れ仮眠。出発間際になって雨が降り出し決断が鈍るが、1時雨が止み、行けるところまで行くことにする。二の沢の急な西溪を途中ザイルを出したりして苦労して登り、本流右岸の岸場に取り付く。青谷－吉田、宍戸－東山のパーティに分かれて簡単な岩場を右上していく。三段下の大滝は、左壁に取付き、右にトラバースして落口に達する。以降2Pでブルジュ入口。しかし、折からの雨とガス。前方に見える大滝らしきものがゴーゴーと音をたて、とても行けそうになく退却を決定する。下りは途中ボルトを打ったりしながら、6Pほどで出合に戻る。このクラシックルートは西朋三回目の挑戦でもまた、そのベールを開いてくれない。心残りである。

（青谷記）

8307
涸沢夏合宿

・1983年8月4日～10日

・青谷知己，小川健吾，中野敏彦
四宮健三，宍戸泰成，東山顕，
吉田浩之，萩田哲也，浜田和康

今年は新人の育成が課題であることから、西朋としてはオーソドックスなスタイルである定着岩登り合宿となった。ここ数年、夏合宿は、渓谷遡行～岩登りから沢登り集中へとより発展的な形態に移り変っていたが、学生中堅層の欠落による力のギャップ，より多くの社会人参加等を考えると、定着形式はやむをえないかもしれない。また、社会人数年目の層までは、剣、穂高の岩場を登り込んでいるのに対し、学生層は全く知らず、岩登りへの憧れという点で、この方面へ行く事を希望する者が多いのも確かだ。

ここ一、二年西朋としては再度力を蓄えるべき時期に来ている。しばらくは、剣、穂高に通うことになるかもしれないが、意識としては全の力を集約する場となる、渓谷や沢登り、もしくは縦走なども組み入れた合宿をめざして行くべきであろう。

今回は指導者に対し、新人（同等も含む）が多く、やっとやりくりする状況であったが、前穂北尾根、滝谷B沢、C沢周辺及び前穂東面とほぼ一通りのルートをトレースできた。新人もその概念をつかむことができたのではないか。来年以降はトップ要員として活動できることを期待している。

久方ぶりに小川健吾さんにご登場願ったがまだまだ健在，北尾根も快適に同行された。もう引退を決め込んでいる諸兄も、せめて夏の定着の際には、涸沢で昼寝でも結構、多くの参加を期待したい。そのためにも再度言われることながら、早期に計画、連絡を計る必要があろう。

（青谷記）

前穂 三峰フェース 登高会ルート

・宍戸、青谷

北尾根登りの余力でもう一本というわけ、北尾根を3・4のコルまで下り、涸沢側に30mほど下ったところが取付き。1P目、右上の4ムニー目ざして40m、容易。2P目が核心部。垂直に近い凹状部で、極力ピトンを使わずに登るが、かなりきわどいバランスを要求される。ここを抜けるとおおまかな岩場となり、右上して北尾根に出る。短いながらも2P目は遊び気分で行くと痛い目に会うだろう。

（青谷記）

8月7日

北穂高岳 滝沢第四尾根

・宍戸、萩田

前日に、前穂北尾根で足慣らしをしているというものの、初めての本格的な岩場を登るということで、北穂に着く前からかなり緊張していた。松濤岩のところからC沢左俣を下っていく。下っているのか落ちているのかわからない程急な下りだという気がする。始めからこれでは先が思いやられるなどと考えながら行くと小一時間で二俣へ到着。第三尾根に行く青谷氏らと別れて、我々はスノーコルへ登る。ちょっとした広場のような所で気持ちがよいが、これから先の登攀のことを思うと気が重い。Aカンテはどれがそれかもわからぬうちに通過。Bカンテ、Cカンテと越え、ガリーの上部で一度トップをやらせてもらう。始め快適に登っていたが、高度が上がるにつれ、恐怖心と岩の脆さでにっちもさっちも行かなくなってしまった。おまけにスタンスにした岩が崩れて、下で確保していた宍戸さんに危い思いをさせてしまった。ほうほうの体でトップをかわってもらう。ツルムの肩からは2回の懸垂でコルに降りた。ここからが核心部だと聞いて、あらためて第四尾根の長さを感じ、うんざりする。下で確保している時に、なかなかザイルが上がっていかないと不安になる。そんなDカンテをやっとの思いで登り切ると、そこは別世界、道があった。スノーコルを出てから4時間。はぼコースタイムどおりであった。

（萩田 記）

三尾根～ドーム中央稜

・青谷、吉田、浜田

今日は全員で滝谷へ向かう。これは西沢からのアプローチがけっこういやらしいので、滝谷への下降から全員メットをかぶり緊張している。四尾根へ向かう宍戸・萩田と別れ、青谷、吉田、浜田は三尾根にとりついた。取付きで休んでいる時。突然落石がおき、3人の頭上を石が飛んできた。全員その場にふせたが、そのあとのきなくさいにおいは忘れられなかった。いざ登り始めると、登攀自体はそれほどではないが、落石の多いのには泣かされた。そして3P目の核心部では高度感のあるヘつりであり、技術のない新人には恐ろしいものであった。そのあとドーム中央稜に向かったが、1P目のチムニー、2P目のフェースを苦労して登り、3P目を難なくこえ、4P目を青谷が登っている途中で雪雨となり、あえなく敗退。雨がやんでから稜線にでた時はもうすぐらかった。

（吉田 記）

第一尾根

・青谷、萩田

北穂頂上からカキレットに向かって20分程下ってB沢に入る。C沢よりは下りやすいが、落石の音が不気味に聞こえてくる。10分ぐらい下ってバンドを伝っていくと、一尾根の取付に着く。バンドを左上する部分は割と易しいということでトップをやらせてもらう。そこから岩を回り込むと、いよいよ壁が現われてきた。しかし、2月目ということもあって、さして支障なく越せる。2P目の凹角はフリーということだが、実際その場に立って怖くてA0にしてしまう。次のバンドでもトップの練習をした。この頃から高度感も増し、ピナクルを抱くようにしてテラスによじ登るとまた岩をグルリと回り込むと最後のAフェースを登って終了。北穂の頂上へ到着。

（萩田 記）

8月9日

ドーム北壁 北西カンテ

・青谷、東山

前日自慢の単車で中央自動車道をとばし、松本で食糧をしこたま買い込み、中の湯まで単車で入り込んだ。アプローチに単車を使うなんて西朋登山史において自分が初代バイククライマーになったのはいうまでもない。

久々の大荷物と沢の増水により、その日

に合流できず、満天の星空と缶詰を子守り唄にして北アの夏の夜を満喫させてもらった。朝一番の下山者に起こされ、西朋テントを目ざし2時間位歩いた。はるばる東京からきたのにXメンバーの視線は冷たく、朝日下山。今日は登山予定なしとのこと。しかし、そこは気合の西朋登高会。午後より人工に連れていかれることになった。人工は今日が始めて、当然あぶみなるものを使用するのも始めてである。このあぶみがひとクセある品物であった。セーラー東山にとって、登っている時はもちろん確保している時も力が必要で、不安がつきまとうものであった。ルート自体は2P弱の短いもので、トップの人にしてみれば食後の運動くらいのものであったであろう。この日はガスっていたので残念ながら北アルプスの山々は見ることができなかった。もっとも恐ろしくてそれどころではなかったかもしれない。

このZPだけが自分の夏合宿ではなかったことを声を大にして叫びたい。自分1人はりっぱに奥穂・西穂をこえ、何年ぶりかで穂高山荘の藤岡氏、上高地の男沢氏と再会して東京へもどったのであった。　（東山記）

前穂東壁右岩稜　吉川ルート～Aフェース

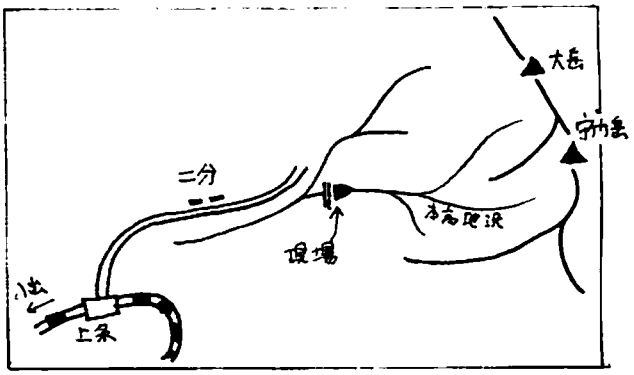
・宍戸、吉田

今回もまた快晴である。しかし、心の中では今日登るルートに対する期待と不安が入りまじり、複雑な気持ちである。

涸沢を出発し、五六のコルを越え奥又白の雪渓を登りつめたころにはもうかなりつかれていた。しかし、そこから吉川ルートの取付きまでがまたかなりの大仕事であり、ルートへ取付く時にはかなりグロッキーぎみであった。取付きでしばらくレストをとって、いよいよ登攀開始である。右岩稜正面の上部バンドは2Pで難なく越す。そのテラスから上が核心部である。ここでは先行のパーティもかなり苦労しているようで、だいぶ待ち時間があった。宍戸氏がトップで登り、吉田がセカンドである。核心部2P目のハングの所を宍戸氏が抜けていき見えなくなった。しかし自分はまだ、アブミを使ったこともないし、使い方も知らない。いざ出発したはいいものの、垂直のアブミも使う所にきてつかえてしまった。どうしてもアブミの2段目に乗れないのだ。そうこうしているうちに腕がはってきてもうどうしようもなくなってきた。アブミを使うことをあきらめ、そこから必死で越えた時には腕はもうパンパンにはっていた。しかし、その後のピッチは比較的やさしく四角を登り終えれば踏み跡のある所へついた。そのあとのAフェースは三ピッチほどで前穂の頂上に抜けられた。途中頂上直下で青谷氏、浜田のパーティが見えた。それから北尾根を越えてテントに帰ったころには、あたりはもうまっ暗になっていた。　（吉田記）

8309
守門岳 本高地沢
(森下遭難現場確認)

・1983年8月29日
・中村正俊、青谷知己、宍戸泰成
四宮健三、他わらじの仲間6名



8月21日守門岳本高地沢を遡行中、西朋26期、森下通夫氏が遭難。あっけなく逝ってしまった。森下氏は西朋20、21に見られるように、ここ数年、西朋の山行をリードしてきた中心人物であり、昨年よりその山行をわらじの仲間に移して、その活動範囲をさらにふくらませていた矢先の出来事であった。

一週間後の28日、遭難現場確認のため現地におもむいた。東京を車で発ち、早朝、わらじの仲間の6名と上条駅で合流、本高地沢出合まで車で入る。ここより沢沿いの踏跡をたどると間もなく問題の擁壁がみえる。遭難はこの擁壁をまき、沢床に降りるための懸垂下降後、水流にのまれたために生じている。沢沿いの踏跡をしばらくたどると、現場より上流の沢床に出られる。そこより10分程下降すると懸垂下降点に至った。遭難当時は台風の影響で水量も多く、この擁壁も水を満々とたたえていた様であるが、現在は様子が一変し、沢床が露出している。一同あっけにとられる中、わらじの仲間会員4名が再度、当時のルートをたどり、当時の状況の確認を行った。その報告は西朋通信(9/8)、わらじ330号に詳しい。確認を終え、沢床にケルンを立てて冥福を祈る。花束を飾り、酒を注ぐ。線香の煙が緑濃い沢筋に流れた。

二分集落や警察へのあいさつをわらじの仲間の方々にお願いし、現場を離した。

なお、森下氏の遺稿集を1周忌をめどに発行の予定である。協力をお願いするとともに、詳細はそちらを参照願いたい。

(青谷記)

8310
頸城 海川、駒ノ川

・1983年10月1日～2日
・遠藤 彰

海川流域には、不動川、奥千丈沢など名だたる険谷があるが、今回は千丈ケ岳南西壁、駒ケ岳などの海谷山塊の岩壁群の現状を兼ねて駒ノ川を遡ってみた。

10月1日(晴れのち雨)

まだ刈り初めの稲の穂の、青みが僅かに残る中、のどかな道をとぼとぼ歩けば、一面のすすきケ原に秋を感ず。他感性物質を根から出すセイタカアワダチソウ(ブタクサ)の侵出により、ススキは全国的に衰退しつつある。海谷渓谷は映画「楢山節考」のロケ地だそうで、まさに日本を代表する農村ともいえよう。

一時間強で山境峠につくと、千丈ケ岳南西壁が屏風の様に眼前に広がる。凹凸の多い不思議な岩肌は、ラビエターを思わせる。また海谷渓谷の奥には鉢山などの奇峰が座り、なるほどここが姥捨て山か、とうなずく。峠から10分で右から駒ノ川が流れる。往路点の橋は流されたらしい。ここから何ぐ上流はブッシュと岩壁の奥に山頂とおぼしきピークが意外と近く望まれた。

しばらくブッシュの多いゴーロが続き、左から入る高高地岳沢は気付かぬうちに過ぎた。5mほどの岩に、すだれの様にかかる滝が現れ、シャ

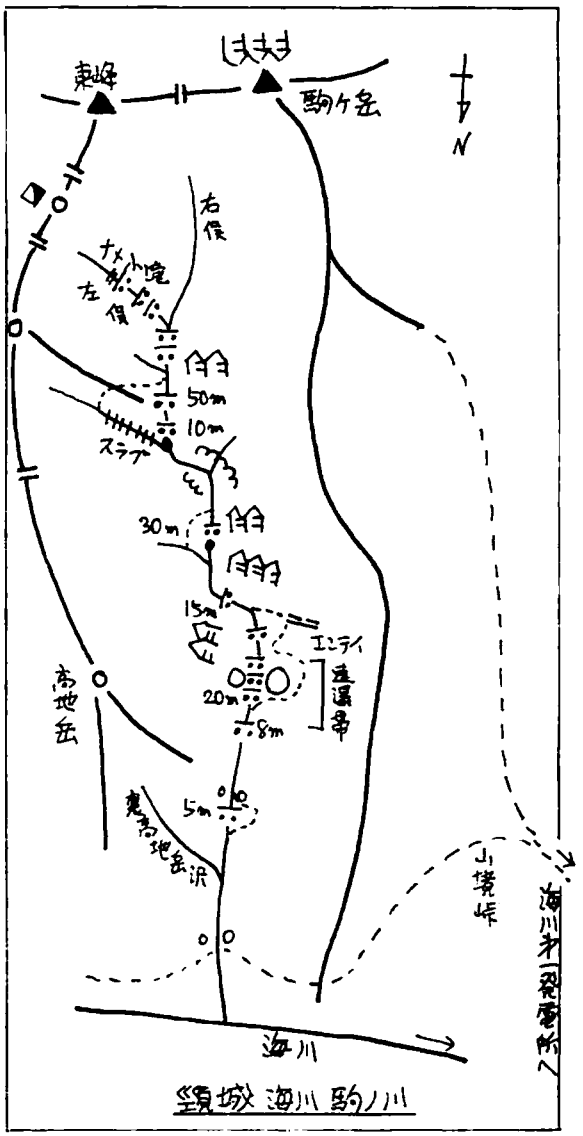
ワーを浴びながら左岸に渡り、岩と岩の間を空身で乗越す。谷は狭まり、巨岩の間をぬって約20mの連瀑が落ちる。左岩の大岩に沿って高巻き、中段に出たがまだ登れそうになく、右のルンゼを登ると潅漑用堰堤に出た。流木壁をたどり、連瀑帯の上に抜ける。正面は岩壁に遮られ、左から15mの滝が倒木を叩く。左岸を登ると樹々の上に一条の滝を望む。30mの小滝である。一枚岩に懸かるその両岸はチがつけられそうになく(右岸のブッシュにルートがある)、右岸のルンゼを少し登り高巻く。流れに戻ろうとして前を見れば今度は50mの大滝が落ちている。アプザイレン10mで沢に降り、淡いゴルジュを大きく左に曲がる。大滝手前のトロは左岸をへつり、大滝に続く10mの滝の下でルートを探すがひとりでは登る自信が持てず、右岸の広々としたスベリ台状のルンゼに希望をつなぐ。ツルツルのスラブは登るにつれて傾斜がきつくなり、角礫凝灰岩のやっと指先でつまめる程度のホールドを頼りに3m程の障壁にたどりつく。ボロボロのリスにハーケンをたて続けに差し込み障壁の下をトラバースぎみに登って四角の下に立つ。岩が軟らかすぎて、ピトンもボルトもきかない。下は100mの滑り台で、落ち着いて立てるスタンスがありながら膝が震え出す。空身となり、クラックをジャミングで少し登りピトンを叩き込む。これを越すとスラブは傾斜もゆるくなり、右の樹林帯へ抜けた。再び沢に戻り、小さいが釜をもつ滝が続き、やがて二股となり、左股をしばらく行くとナメ滝5mを最後に源流域となった。駒ケ岳東峰から高地岳に伸びる稜線に出て東峰を目指すがガスで視界全くなく、ヤブコギ1時間半で日没引き分けのビバーク。小谷温泉泊りの夢ははかなくついえ、やがて雨も降り出した。

(来海沢 735 — 山境峠 850 — 駒川
取付 915 — 小滝下 1120 — 大滝下 1315
— 二股 1530 — 稜線 1600 — ビバーク 1740)

10月2日(晴れ)

翌朝さらに1時間半ヤブをこぎ、東峰。駒ケ岳南壁を眺めながら急降急登後、山頂。千丈ケ岳、旗振山、船浦山などの岩壁群の向こうに日本海が広がる。鎖場というより、アプザイレンの領域の急降を繰り返して山境峠へ戻った。

(発 707 — 東峰 825 — 駒ケ岳 905
— 山境峠 1105 — 来梅沢 1215)



(遠藤記)

8311
小出俣川マチホド沢本谷～赤谷川上流

・1983年9月30日～10月2日
・青谷知己，吉田浩え

10月1日（晴，夕立）

登山体系に目を通していくと、谷川の近くに気になる沢の記述があった。小出俣山の一部分の響きが妙に興味をかきたてる。

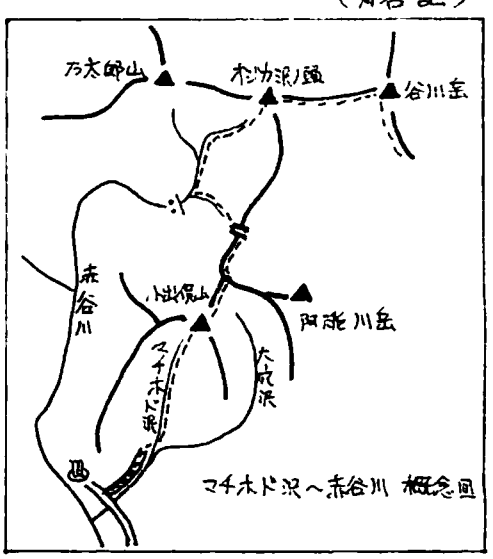
夜行で小泉氏とばったり会い、雑談する。多摩で仮眠を取り、越後湯沢に入るパーティとともに川古温泉までタクシーで入る。小出俣に入る林道を合い、車止めまでどっぷりとたどると手無橋である。果てはるか小出俣を望み、中腹にはすばらしき滝が望まれ期待をふくらす。

しばらく平坦なゴーロをたどると、小出俣のりっぱな滝を見る。これを左からまくと荒れた感じで雑木がうるさい。すると「大ヒラナメのセン」に出る。しかし、記述とは裏腹にあまり見ばえのしないナメだ。これを何なく過ぎてまもなく前方に大滝が立ちふさがる。数段にわかれ壁もすっきりしないのですっきりしていない。一段目流れの右を容易に登る。二段目はがっしり気味の部分を強引に越すらしいのだがふんぎりがつかず、右上へルンゼを登り小さく高巻いて落ち口へ降り立つ。ここを抜けると息をつかせず大スラブ滝が現われる。落口が2つあり奇妙だがすばらしい。どうせならと落口の中間帯を直登する。1P目容易、2P目より吉田が相当びびりながらY字の要に達する。ここより左手の水流の右側沿いに登るのだが、かなりのバランスを強いられる。やっとの思いで中間リッジにはい上がる。左のオゼノ沢の滝を見てから右の本流に下りる。水流もせばまりいくつか滝を越えるとスラブ帯から大きなナメ滝をむかえる。これもザイル2Pで慎重に越す。上部は更にスラブが続くが水流も減って乱雑なクボになってくる。時間も遅く適当なビバーク地を捜すが平地がなく上へと進むうち雨が降り出す。こうなると根性が入る。かむしゃらにクボをこいで稜線の一角に抜け出した。そこが2m四方の平坦地。どうにかテントを張る。最後で果てたのか、「もう明日は一番で山を下りる。」と言っている者がいた。

10月2日（快晴）

外をのぞくとド快晴。昨日の気分もどこへやら。紅葉の輝く稜線へ歩み出す。といってもヤブこぎ。しかし人跡のない新鮮な小出俣山は何とも気持良い。谷川南面がいつもと違った角度で展開する。谷川乗越より左手の赤谷川めざして小沢を下降する。15分も下ると本流に出る。おだやかな流れに心もなごむ。ドウドウノセンを上からのぞこうと下降してみるが、滝にはばまれ路口らしき屈曲を前方にみて断念する。ここからの赤谷川上流は何ともすばらしい。水量豊かなゴルジュ，草紅葉に彩られた源流域。沢登りの楽しさここに極まる。といった形容がぴったりだ。最後の二股を左にとってオジカ沢の頭に抜け出す。紅葉の稜線慢歩。谷川の頂上を経て天神平に下った。はるか小出俣山を望み、変化に富んだ2日間の山行を思うと、我々だけの秘密の宝を拾ったような気分であった。

（青谷記）



マチホド沢～赤谷川 概念図

〈 赤谷川　上流 〉

8312
丹沢 セドノ沢

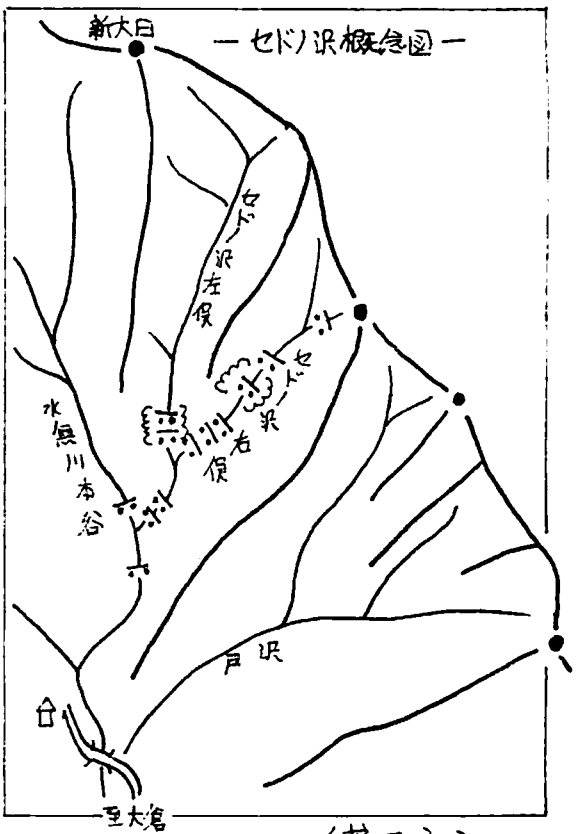
・1983年10月2日
・荻田哲也、浜田和廉

10月1日に浜田と会った際、翌日、日帰りで沢登りにでも行こうという話かでた。どうせ行くなら少しは岩の要素も含んだ沢ということから、セドノ沢ということになった。この沢には30mの大滝があるからだ。そこでハーケンを買込み、ザイル、ゼルプストベルトなど登攀用具を準備し出発した。

大倉から戸川林道を2時間程で戸沢出合に到着。水無川に降りると早速足袋と草鞋に履きかえ、遡行開始である。すぐにF1が現われるが、水流左手に鎖もあり楽に越せる。F2が見え始めると左岸から目的のセドノ沢が流れ込んでくる。鎖のある滝が出てくるが、面白くないので壁をトラバースする様に越す。わずかの河原歩きで、左岸より右俣が合わさる。余りに近いため、最初はまだ先にあるだろうと思って、そのまま左俣を1/3程遡行してしまった。再び戻って右俣に入る。落差数mの小滝が何本も続くが、いずれも簡単なものばかりで、いささか拍子抜けといった感じ。やがて、沢が荒れて、倒木が多くなってくると、左岸から大きなガレ沢が入ってくる。さらに単調な河原歩きを続けると、突然大きな岩壁がみえてきた。30mの大滝の様である。さすがに30mだけあって、真下から見上げると迫力もあり、また登攀の困難さを予測させる。気を静めるためにランチということにし、休止をとる。ゼルプストを装着し、いよいよ登攀開始。トップは僕がやることになった。水流のすぐ左側を直上して、広いテラスに出る。さらに直しかけたところ、途中でかなり困難なところに出た。おまけに岩も濡れていて気持ちが悪い。とりあえずランニングビレイをとろうと思った時に、気のゆるみから後ろを見てしまった。と次の瞬間滑落したが、幸いにもテラスでとまった。ザックがクッションになって怪我もない。もう怖くなって、そのルートはやめて、さらに左手の乾いた、傾斜のゆるい岩場にルートを求めた。落ちたショックの所為か手足がよく動かないが、ともかく、上のテラスに出てセルフビレイをとった。後は巻き道を使って滝上に出て遡行していくが、間もなく水がなくなったので左岸の湿れた沢をつめて行くと、すぐに新大日の頭の下に飛び出した。政次郎尾根を下って戸川へ下った。

今回の沢登りで考えたこと、一岩場では片時も気をゆるめてはならない。当り前のことだろうが、身をもってそのことを確かめたわけである。

（大倉 1.5hr 戸沢出合 0.5hr セドノ沢出合 2hr 大滝 0.5hr 稜線 1hr強 戸沢出合）



（荻田記）

8315
大台ケ原～大杉谷

・1981年10月22日～23日

・遠藤 彰

「関西の沢(谷)をやるなら、まず東ノ川」という「溯行」No.13（大阪わらじの会 1982.12）に白朋谷を下降、東ノ川の核心部を溯行している記録があった。後で知ったが、沢登りのルートとしては一般的なようだ。（白朋の紹介が載っている「山と渓谷」1981.8に、この時の同会、中庄谷氏の文とグラビアがある。）

10月22日（くもり時々雨）

朝5時に寝を出て自転車で駅まで行く。山へ行くのに和歌山はまったく不便で、南紀以外は一度大阪へ出た方が早い。大和上市から2時間、紅葉のきれいなスカイラインをバスは大台ケ原についた。あいにく空はくもりだが、そこは降雨量日本一を屋久島と競う地帯、いたしかたない。大台の駐車場から約20分で尾鷲辻。全くハイキングコースとしてよく整備された道で、男1人で歩く所ではない。尾鷲辻から5分程歩き、広々とした鞍部から下り始める。度々数頭固りの鹿で鳴き、源頭部の紅葉といくつかのナメ滝を楽しみながら下る。1時間程たち、そろそろ懸垂下降を要する滝に出るはずだったが、意外にもハイカーらしき人影。へえー、こんなところまで……と思ううちに吕橋が現れガクゼン。尾根を1本間違えて下ってしまった。登るはずだった東ノ川である。

短い秋の日に2時間のロスは大きく、また雨まで降ってきたので、沢登りはあきらめて、東ノ川最後の大滝を見物して駐車場へひきかえす。このまま帰るのはしゃくなので、大杉谷を下ることにした。今は探勝路がついているが、東ノ川に並び称せられる名渓ときく。さすがに、3～4時間遅く出発したので、人は全どおらず、どんどん下る。天気は快方に向かい、晩秋の残照は励ましてくれるようだった。「また、おいで」と……。

2時間程で堂倉滝、奥に続く堂倉谷はスケールからいって、大杉谷の本流と目されるとあり、溯行1日、登ってみようかとも思ったが、東京の青谷にコース変更を連絡した後だったし、林道が谷を中断しているのはおもしろくないので、素直にそのまま下る。数々の吕橋とスケールが大きく、また個性豊かな滝の連続である。遠かるから楽だが、溯行するのは相当大変だったであろう。また、すばらしかったであろう。七ッ釜の滝前の展望台あたりまでですっかり晴れなり、遅れたパーティを追い越した。500人収容という桃ノ木山の家についたが、予約がないと泊まれないという。山小屋で泊めてくれない!? しかたなく七ッ釜の滝前の展望台まで戻り滝の音と夜目にも白い流れを見ながら眠る。ビバークする覚悟でいたのに、一旦軟弱になると、大勢の人が近くにいながら一人眠るのはなぜかせつない。

（大台ケ原駐車場 1100－尾鷲辻 1155－吕橋 1300－1425 駐車場 1450－日出ケ岳 1515－堂倉滝 1635－桃ノ木山の家 1750－七ッ釜ノ滝 1830）

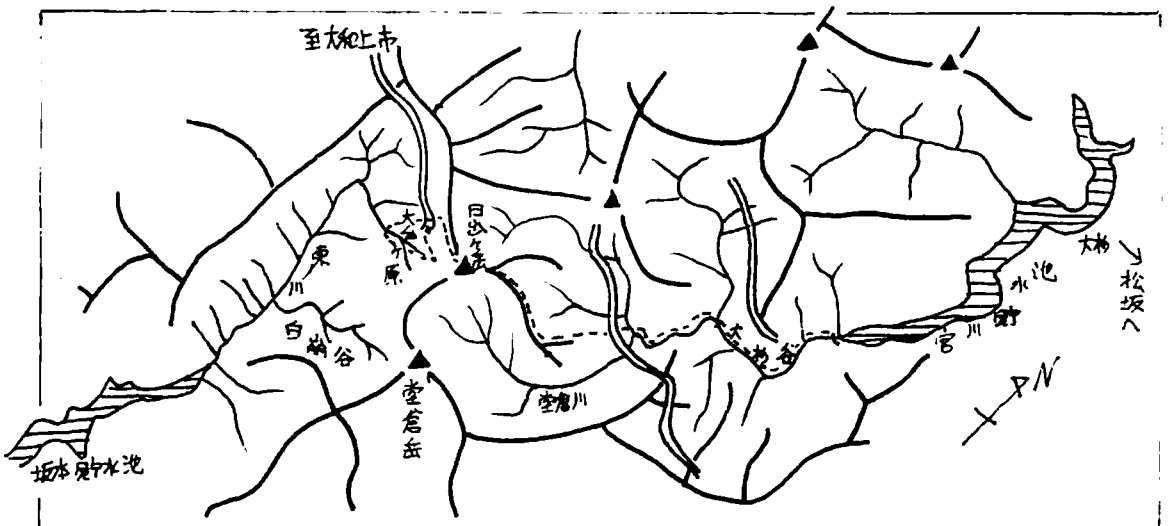
10月23日（はれ）

翌朝、小屋に泊まっていた人が上がってきて目がさめる。朝食もそこそこに、渓流タビを履いて下り始める。今日は滝も良いが、淵やゴルジュがまたすばらしい。水は透明度が高く、青々とした流れを岩をくり抜いて作られた数歩道から眺めながらぐんぐん歩く。悪い習性で、道のある、人の多い所はとばさないと気がすまない。くどいが、道さえなければ、日本有数の険谷、名渓であろう。のんびりと楽しめばよいのだ。

で、結局は人造湖の渡船でその日の順番がわかる。はずかしながら11番でした。

（発640－桃ノ木山ノ家 655－シシ淵 740－1000 船乗り場 1020－1150 宮川 1220－松坂 1400）

（遠藤 記）



〈大台ヶ原～大杉谷概念図〉

8316
谷川岳 オジカ沢

・1983年10月23日～24日

・青谷知己，浜田和康，吉田浩之
山田裕久

10月23日

水上 244－251 谷川温泉 257－400 幕岩
410－435 二俣 605－830 ねじれの滝下
850－925 大滝下 －1150 4ムニー滝上
1215－1400 撤退 －2050 ねじれの滝下 2113
－2220 ビバーク地

水上からタクシーで谷川温泉まで、そこから夜道を二俣へと歩く。二俣でたき火をしながら夜の明けるのを待ち、6時5分遡行開始。頭の上は晴れているが、稜線にはガスがまとわりつき、時折雨も落ちてくる。両岸の紅葉がすばらしくきれいだ。魚止めの滝は左岸をあっさり、次の滝は右岸を登り、そのままやぶの中をいくつかの滝をまいて沢に降りる。やがてねじれの滝が現れ、右岸の小沢を落口と同高度まで登ってからトラバースして落口に立つ。小さな滝をいくつか越えると、沢は広がりをみせるようになり、目前を大滝がごうごうと流れ落ちている。大滝は流れの中を少し登ってから左岸のスラブに絡りそのまま直上して落口に出る。そこから滝を1つ越えると、巨大な岩の間を水がものすごいいきおいで流れている。4ムニー滝である。ここは、浜田－吉田は水流の左岸沿いに、青谷氏－山田は左岸のかん木の中を高巻き、大きな岩の上で合流し昼食をとる。時刻はもう12時をまわっている。これで核心部は過ぎたものの、小さな滝が連続し、なかなか行程がはかどらない。80m ナメ滝は右岸のやぶを登る。このころから雨の中にみぞれがまじるようになり、それがやがて雪に変わる。気温も大幅下がってくる。滝をまいて左岸をいくつかにやぶ沢の左岸の尾根を登ってしまいやぶが濃くなる。雪は激しさをます一方で、午後2時、結局引き返すことにする。やぶ伝いに下り、大滝を降りてなどなく日没となる。暗い中、ヘッドランプの光を頼りに沢を下るのはなんとも心細いものであった。ねじれの滝を左岸沿いに2回の懸垂下降で降り、さらに少し降った所で青谷氏が右岸にあるはずのまき道を探すが見つからず、ここでビバークとなる。（まさにこのまき道は荒廃してしまったようである。）各自着れるもの目すべて着て岩の上に横になるが、寒くてふるえがとまらない。それでも疲れのためか時折うとうとする。

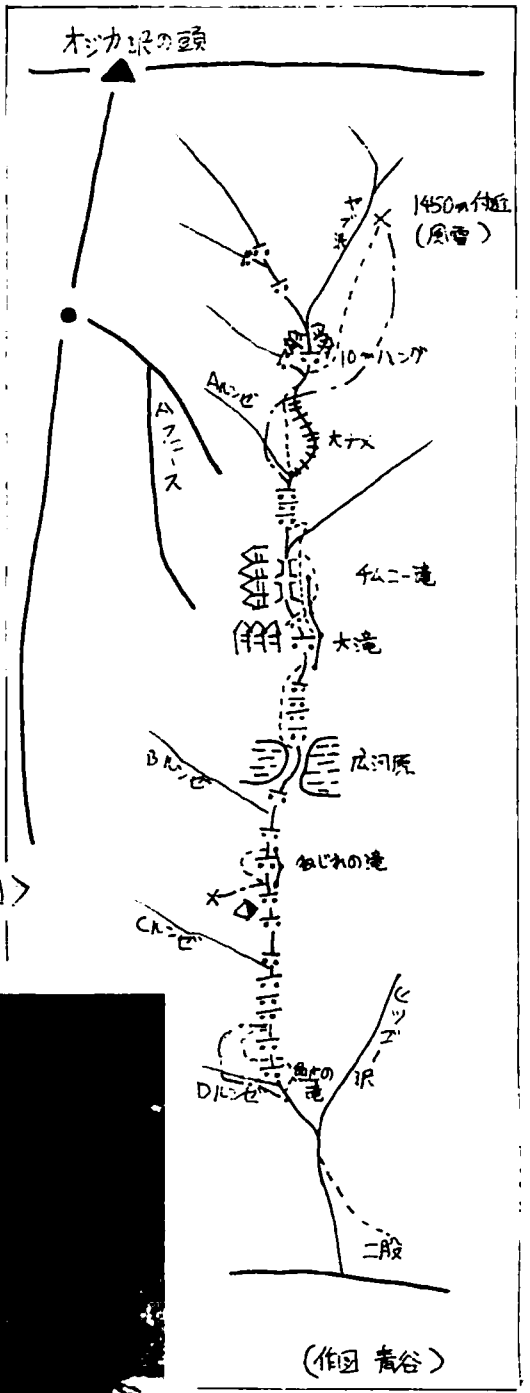
10月24日

発 650－1000 二俣 1015－1020 救助隊

と会う 1115 ― 1220 谷川温泉

030頃ふり始めた雨が雪となり、風もあり、かなりきびしいビバークとなった。5時45分頃明るくなったので起きるが、体が固まってしまって思うように動かせない。朝はわらじが凍てて運動靴であったため、かなり難儀している。右岸を大きく高巻いて、魚止の滝の下に出るもう滝もなくなり、やっとほっとする。途中、救助隊に遭遇し[illegible]飲みものをもらえたのはとてもありがたかった。疲れた足を引きずって昼すぎやっと谷川温泉につく。振り返る幕岩は昨日とはうって変わって白と黒の沈んだ世界であった。谷川はもう冬である。

（山田記）



---- 往路
—·— 復路

<オジカ沢概念図>

<オジカ沢大滝>

救援活動経過

650　水上駅伝言板　「連絡せよ」

"晴れ"　金盛館（TEL　02787-2-3280）

昨日の天気：晴れてはいたが寒かった。
山の方は雪が降った模様。

740　宮崎上台駅へ向かう「いない」

"雨強まる"　宿主の話「中ゴーは雪がついている」

820　中野へTEL「連絡なし。出合までいって様子を見よ。1時に再連絡」

900　宮戸、宮崎行動開始、二俣までの予定

"雨強まる""オジカ沢方面ガス"

920

"雨上がる。オジカ沢方面、下部紅葉雪がついている。寒そう。上部紅葉ガス→晴れそうになし"

940　オジカ沢方面ガス濃し、見えなくなる

"雨降り出す。"

1125　宮戸「無事下山」

反省会で考えたこと

1983年秋の谷川岳オジカ沢山行において、最終下山日に帰宅せず、心配していたが、翌日無事に下山してきたということがあった。その反省会で考えたことを記す。

西朋の歴史は30余年におよび、もはや伝統のある会といってよい。1982年から1984年の山行総覧をみても、山行にバリエーションが豊富で、特に沢登りが充実し、岩、雪山、縦走をみても高度である。しかし、月例会や今回の反省会に参加して個々の会員の山行へのとり組み方をみていると、何か伝統が空洞化しているような気がする。

まず、山行を準備するにあたり、その山行に対する個々の会員の動機づけが不明確である。熱心なメンバーが、「面白いから行こう。充分調べてあるから」といえば、何となく「それじゃついていこう」ということになり、あわてて地図をかって、あまり詳しくは調べずに山に出かけていく。何故、自分がこの山行に参加するのかという必然性が問われていない。

また、準備会で、天候によるルート変更、ビバークの可能性の有無、何時にどの地点に到達しなければ引き返すか、メンバー構成にどのような問題があるかなどについて詳細かつ熱心な論議がかわされることもないようだ。こういう問題は、個々の会員の安全にかかわることなので、リーダーの胸の内ではなく、あらかじめ全員で充分に検討すべき問題だと思う。

また、山行中の判断の問題であるが、今、自分達がどこにいるのか、何時頃何時までに確実にどこに到達できるのかという判断は基本的なことである。「思いのほか時間がかかったが、何とかぬけられるだろう。」という希望的観測は、冷静な判断を妨げるので注意を要する。

今回の反省会では、寒さのため手がかじかんで行程がはかどらなかったこと。引き返すタイミングが遅れたこと。尾根上は積雪があったのに雪に対する準備がなく、そのため引き返さざるを得なかったこと。ビバークの予定も準備もなかったことが問題点であった。

きびしい自然条件の中で山登りをするのだから、伝統を守り発展させるためにも、準備から反省会まで、きっちりと建設的かつ熱心にやってほしいと考える。

（山本　記）

8317
足尾　湯ノ川～皇海山

・1983年11月2日～5日
・荻田哲也，吉田浩之

11月3日

本俣 515 — 900 三俣沢出合 905 — 4m滝 920 — 2段4m滝 1025 — 1200 広沢出合（ランチ）1300 — 1500 鈴小屋沢出合 1510 — 1600 幕営

沼田駅での仮眠かさめぬままに、タクシーにゆられて真暗な本俣で降りる。月明りで山のシルエットが浮かび上がり、真暗な所に二人だけでいると別の世界にきてしまった様でいやに興奮してしまう。

ヘッドライトを頭につけてのろのろと歩き

始めた。2時間ほど林道を歩いて河原に降りてわらじにはきかえる。さすがに11月の水は冷たく長い間足を水につけているのはつらい。特に苦労することもなく三俣沢出合まで行く。予定では今日の目的地はここだが、まだ9時、行けるところまで行くことに決めた。歩き始めるとすぐに4mの滝が現われた。萩田が左岸から吉田が右岸の流木を利用して越える。続いて2段4mの滝が現われた。下段のほうは右岸から越せるが、問題は二段である。三方すべてが壁のようになっていて全くなかなか取付きがわからない。しかも、荷が重くて後ろに引かれてしまい、どうしてもうまく登れない。そこで空身で登り、ザックは引き上げることにした。萩田が先に登り、下で吉田が荷をつけて、上で萩田が引き上げた。ここで吉田はだいぶ手間取り、下半身はずぶぬれになる。しかし、天気は最高だったので気にせずどんどん進む。小滝を次々と越える。ここで1つのアクシデントが起きた。吉田が2m程の滝を左岸から越えた。下には結構大きな釜を持っている。落葉でホールド・スタンスが見つけにくい。萩田も大分苦労していた。上から吉田が指示をしてやっと登り切ったと思った瞬間、萩田は釜の中で泳いでいた。これにもめげず広沢出合についたのが1200。服をぬいで岩の上で乾かしながら、ラーメンを食べる。長さ30mのスラブ滝を越え、暗い沢を進んでいく。鉛小屋沢出合をすぎて10mの滝を注意して越えたあたりで幕営地を捜しながら登る。結局ほぼ沢の終わりに近い段丘上にテントを張り、焼肉とワインで2人だけの乾杯をした。

11月4日

起床520－出発705－820稜線830－907皇海山1125－1245鋸岳1300－1700庚申山1720－1930銀山平

沼田り寝たこともあり、快適な朝をむかえる。歩き出すとみるみる水量は減り、すぐにすねのやぶとなる。しばらくやぶをこぐうちに、道に合い、この道を1時間強歩くと皇海山頂である。

下山は一般道をおりたが、庚申山を下りる道で、これで皇海の雄姿ともしばらくお別れだと思うとなかなか歩き出す気になれなかった。2人であまったフィルムを全部使い果たし降り始めた時は、また来るぞ、という思いでいっぱいであった。

（吉田記）

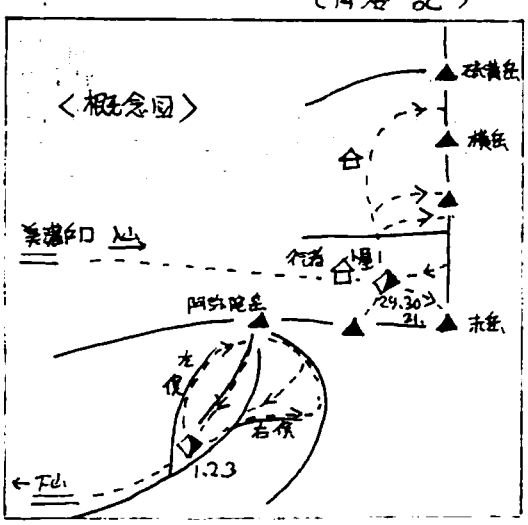
8320
八ケ岳集中冬合宿

・1983年12月29日～1984年1月3日
・遠藤彰，青谷知己，中野敏彦
宍戸泰成，東山顕，吉田浩之
浜田和慶，山田裕久

昨年の八ケ岳東面の集中山行は、知られた八ケ岳の中でも新鮮な場所であり、充実した合宿であった。今回も、新人の多さ、社会人の日程などにより、正月を中心とした八ケ岳の集中山行とした。正月の混雑をさけるため、前半で横岳～赤岳西面でのトレーニング。後半は広河原沢へ転進しての氷登りとした。東面のような静かな登攀は望むべくもなかったが、特に順番待ちで口スすることもなく、楽しい充実したルートを登ることができた。今年は雪が多く、裏同心ルンゼや広河原沢右俣は埋まってしまい残念であったが、それでも三又峰ルンゼや広河原沢左俣では氷登りを堪能することができた。

この正月の技術収得を、1月以降の山行にどう発展させていくかが各人への課題であろう。なお、広河原沢側の中央稜は、ほぼ問題なく登下降でき、利用価値が高い。

（青谷 記）



12月30日（はれ）

赤岳主稜～南峰リッジ

・遠藤，山田
・発 710－取付 810－終了 1120－南峰リッジ
末端 1250－終了 1500－帰幕 1600

ショルダーリッジへ行く中野達と別れ、トレースに導かれてなお左ルンゼをつめる。滝で行きづまり左岸側の5m程の凹角を登って、その上の雪壁を少し登った所でセカンドの山田を確保する。やがてリッジとなって、大部分コンティニュアスで進むと、前方は壁となり正面を登った。再びリッジを登り、主峰の左側の一般ルートに出た。

中野達はまだしばらくかかりそうなので南峰リッジを望まることにする。南峰から中岳側にトレースがあり、先行者もあったので降り始めたが、これは一般ルートではなく、文三郎尾根にダイレクトに下る、南峰リッジの右稜であった。先行者は引き返したが、ほとんどクライムダウンできそうであったのでそのまま下ることにした。リッジの末端で15m程アブザイレンし、下から見てピラミッド型岩峰の右の岩峰の一段道側に下りる。雪壁をトラバースして、中央稜にとりつく。急斜面を左側から巻きこむようにしてリッジにとかり、続く壁は右側にルートをとったが岩がもろく、緊張させられた。後、少し登ると先行下った際の自分達のトレースに合流し、待っていた中野達と共に帰幕した。

（遠藤 記）

三又峰ルンゼ

・青谷，東山

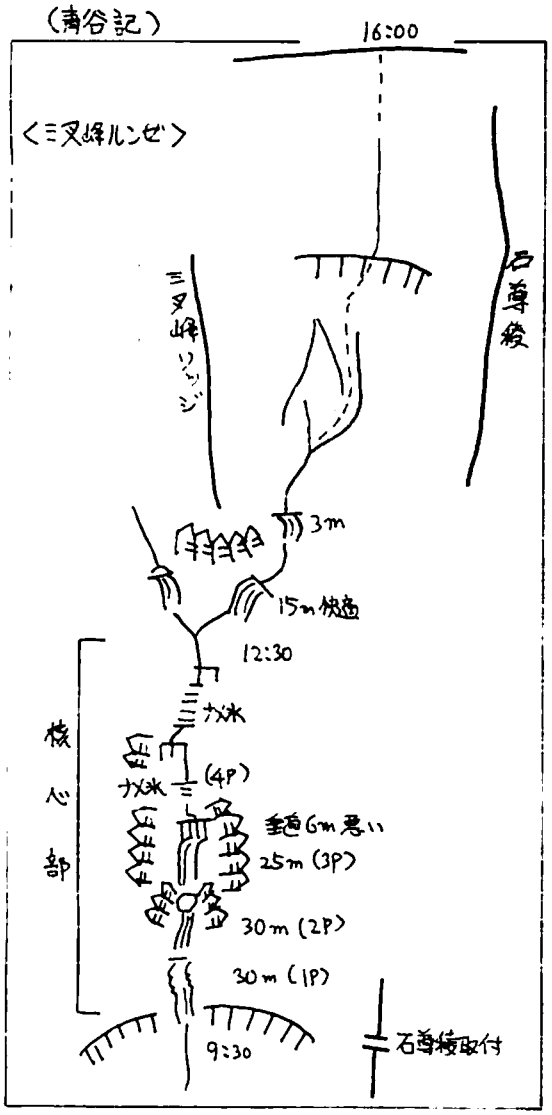
三又峰ルンゼに入ってしばらくはラッセルとなる。下部の滝は埋まっている。

石尊稜の取付を右に見送って最初の氷瀑となる。両岸切り立ち、中央に幅1m程の氷柱が下がっている。取付は垂直である。一二歩ステップを切り思い切って取付く。部分的に垂直に近く厳しい。30mで左手の岩のビレー点へ、腕がぴんぴんになる。東山も苦労しながら登ってくる。2P目、氷が部分的に顔を出す雪のルンゼ、容易。3P目、核心部の6mの直瀑、左手に取付くもすべって敗退

右上気味にトラバースして越える。4P目、氷の発達よく、傾斜はゆるいものが多く快適に越える右上のダケカンバでビレー、小休止をとる（1200～1230）。ラッセルすると二段になる。左側はカラ滝になっており、右側にはすてきな氷瀑がかかる。傾斜もよく、快適にダブルアックスで登る。傾斜もゆるくなり、以降コンテで進む。上部は大きく広がりラッセルとなる。途中の岩層（10m）を越えると傾斜も増し、3Pで稜線へ出た。（1600）夕暮せまる中、満足感にひたりつつ天幕へかけ下った。

（下部のゴルジュ帯は氷が連続し、傾斜もあり部分的にきびしいが充実した氷のルートであった。）

（青谷記）



ショルダー右リッジ

・中野、吉田

吉田にとっては冬の初めての沢登り。今までにアイゼンを手で登ったことがないので不安である。遠藤・山田パーティと別れて2人でラッセルをしながら右リッジの方へ向かうが、途中でつかえてしまい、もどり、主稜へ向かう尾根を登ることになった。しかし、このルートも取付きで苦労した。何度も前進、後退を繰り返しながら、やっと広いテラスに出ることができた。そこから何ピッチかも岩稜を登るが、ショルダーに立った時はほっとした。（吉田記）

12月31日

宝冠心ルンゼ

・遠藤－吉田，宍戸－山田

冬期氷瀑登攀代表的ルートということもあり、さすがに人が多かった。自分達のパーティの他に、3つほど別パーティがあった。赤岳鉱泉から30分ほど入ると、まず15mの滝が現われる。雪に半分以上埋まっていて氷は7～8mほどだ。この滝は難なく越える。そこからしばらくいくと3段30mの滝が現われるはずであるが、ほとんどうまってしまっていて7～8m位しか氷がでていない。しかし、そこがけっこうきわどく、氷をばんばん落としながら登っていった。ちなみに山田がここで踏ん張った。そして10mの迂滝を登るとおしまい稜線までラッセルであった。時間が早かったので吉田・山田は硫黄岳まで散歩に行き、遠藤・宍戸は小同ベワラックを登りに行った。（吉田記）

中山尾根

・青谷，東山

今年最後の山行を飾るべく、最後の力を出しきったといえよう。まず下部岩壁でこの日の体力を使い切れにしてしまった。30分ほど落ちたりへばりついたりの繰り返しであった。結局トップも同じ右寄りのルートを登ったが、何本かのルートを開拓しつづけた。

上部岩壁までは、手ごろなラッセルなどあり、まずはなんとかついて行くが、大変なのは、最後のトサカ状ナイフエッジである。IPせっかく恐ろしい思いをして登っても、身の安全地帯はコッペパンのフタほどの大きさしかない。後続パーティにあおられるようにして登りつめていく。最後はトラバースぎみに登りフィニッシュである。かなりの高度感がある。せめてのすくいは天気がおだやかなことだ。トップの残すシュリンゲに命を託す。かろうじてピナは回収したものの あの真赤なシュリンゲはいつまでもいつまでも光りつづけていたのが後続に無事に立っても目に映っていた。下山途中、何度も何度も振り返って今日1日のコースの充実感を味わい、一年間の山行を象徴するかのようなシュリンゲは二度と忘れぬものとなるであろう。

（東山 記）

1月2日（はれ）

広河原沢左俣

・青谷－山田，宍戸－浜田

・発630－10m上 1150－ハング滝上 1315
－中央稜 1415－1423 阿弥陀岳 1525
－1630 帰幕

出発してしばらくは河原歩きとなる。続いて小さな氷瀑をいくつか越えると10m位の氷瀑が現われる。氷の色は白くもろそうである。ルートは滝の左岸沿いと右岸沿いにあるようだが、左岸沿いのルートには先行者がいたので右岸沿いのルートをとる。ここを青谷氏がトップで登り切ったが、傾斜もきつく、セカンドの僕でさえ、ロープに引いてもらってやっと氷にとまっていられるといった状態であった。細い滝をまくと、3段の10m位の滝となるが、ここの氷は青味をおびており、さっきの滝とはちがい、ピッケルもよくきまり快適に登ることができた。続くナメ滝も快調に登り、ハング滝の下につく。この滝は夏には流れは岩から離れて落ちているのが、いまはそのまま氷り、本当に垂直である。ここにも登った跡がある。すごい人がいるものだ。僕達は左岸を高巻く。普通はこのあたりから中央稜へ出てしまうのだが、このまま詰めていく。もう滝もなく、雪の斜面を登っていくとやがて中央稜に抜け、ここから阿弥陀岳までは ほんのわずかであった。

（山田 記）

広河原沢右俣～奥壁

・遠藤、吉田

・発630－右俣 705－南稜 1005－P3 1015
－正面壁取付 1200－終了 1335－1400 P3下 1500
－右俣 1605－帰幕 1640

本谷出合をすぎてすぐ3m程の氷を登り、右から枝沢を入れた先に約5mの氷瀑を見る。ここでアンザイレンするが、この滝は思ったほどではなく、確保なしで登った。しばらく行くと左岸に60mはありそうな大氷瀑が懸かる。（広川健太郎氏にクリスマス・ルンゼと教えてもらったようである）なかなか見事な氷で先が期待された。これを過ぎさらに本流をつめるが、やがてゴルジュとなり、小氷瀑を懸ける右ルンゼを入れたあと本流は左に右に曲がりながら傾斜を強める。しかし、氷は一向に現われる気配がない。延々と雪が続き、稜線も間近いようである。トレースがだんだん心細くなったのは、がっかりして引き返したためか？最後に5m程の露岩があり、ここで初めてジッヘルの必要を感じる。直登しようとしたがホールドが細かく右側の雪壁に逃げる。後続パーティと吉田はそのまま直登した。またしばらくの雪の急斜面の後、南稜のP2下に出た。

このまま帰ってはおもしろくない。吉田はもっと氷を登りたいといい、クリスマス・ルンゼを登ることも考えていたが、下降するには右俣上部は傾斜がきつすぎる事と、遠藤の個人的趣味から正面壁を登ることにする。P4の手前から本谷3ルンゼを少し下り、正面壁に回りこむ。取付がわからず、基部を1時間位で行ったり来たりする。結局は目の前の壁がそうだろ

うと、はなはだ自信なく思いながら、意樣にピッケルをとって登り始める。3m直上後右にトラバース、リッジに出て15m程で壁の下に着く。ここで残置ピトンを見つけ安心する。直上しバンドに沿って左上(5m)、再び直上して2ピッチ目とする。正面壁は案外もろく、後続パーティ(3人ンゼを登ってきた)ともども、ボロボロ落石を繰り返したが、3ピッチ目にはどう考えても、前にはあったホールドを使って打ったとしか思えない残置があり、A0となった。ここで、遠藤はマントリングで抜けようとして5m程転落。(落ちたので負け惜しみだが、III+位に感じた)左上するかぶり気味のバンドをつたって終了。コンテで登ると阿弥陀の山頂はすぐだった。

(遠藤 記)

8321
木曽 御嶽山

- 1984年1月15日～16日
- 青谷知己、遠藤彰、野口

1月15日(くもりのち雪)

木曽福島900－八海山(四合目)1030 2P ゆワリフト下1330－田ノ原1445

正月山行の際、青谷が友人と木曽の御嶽山に行く予定である事を知り、同行させてもらう事にした。登り残した3000m峰の一つでもあり、私事ではあるが、木曽節と共に20年近く心にひっかかっていた山でもある。同好者は青谷の好む山スキー＆温泉ツアーの前回のパートナーの野口氏、懲りずに再び登場であった。

関西からでは、中アに行く適当な列車がなく、5時頃近く駅でごろごろした後、電車から降りてきた二人をせかしてバスに飛び乗った。バスの終点は四合目、スイスイとリフトで登るつもりであったが、非情にも「登山者おことわり」スキーをはいてもダメだと言われ、ゲレンデスキーヤーをにらみながら、シールをきかせて登りだした。ゆワリフト下から林道沿いに山を巻き、田ノ原へ出て幕営する。午後から風雪が強くなった。

1月16日(うすぐもり)

起床500－発700－815 八合目スキーデポ－王滝山頂1005－1025 御嶽山頂1135－八合目1150－1225 摩訶池1335－スキ場下(八海山)1400

一晩中風が強く、吹雪だったらスキーに専念しようなどと言いつつも、行けるところまで行こうということで出発した。御嶽の頂上は雪の中、霧かんもつけぬ4～5人のパーティをあっさり抜き、快調に登って森林限界を少し越えた八合目に着く。スキーをデポし、アイゼンに替えたが、結構雪が深いところもあり九合目でワンピッチ。王滝山頂はすぐだったが、ここから先はやたらと風が強く、青谷の眼鏡が真っ白となる。ベルグラだけでまさに雪の殿堂というのがふさわしい剣を抜け、硫黄の臭いや、突風にあおられながら、やっとの思いで剣ヶ峰にたどりついた。

下りは早く、九合目で食事をとった後、あっという間にスキーをデポした八合目に着いた。小灌木の間を縫って滑り降り、テントに戻る。今朝遠い抜いたパーティは僕らの速さに恐れをなしたか、途中で断念したらしく彼らのテントはすでになかった。

ゲレンデに入ってからの僕らの華麗な大滑降については申すまでもない(情けない者はお固きめさるな)。とも角山スキーの効果を再認識した山行であった。

なお、やはり青谷先生の御顔は風傷だらけとなったらしく、帽子を忘れて耳を落とさぬ様必死だった遠藤はからくも3度目の凍傷を免れた。3000mは甘くない。ちなみに、野口氏はアイゼンをつけるのはおろか、冬山登山は初めてとのこと、脱帽。

(遠藤 記)

8324
天元台～若女平スキーツアー

・1984年3月28日

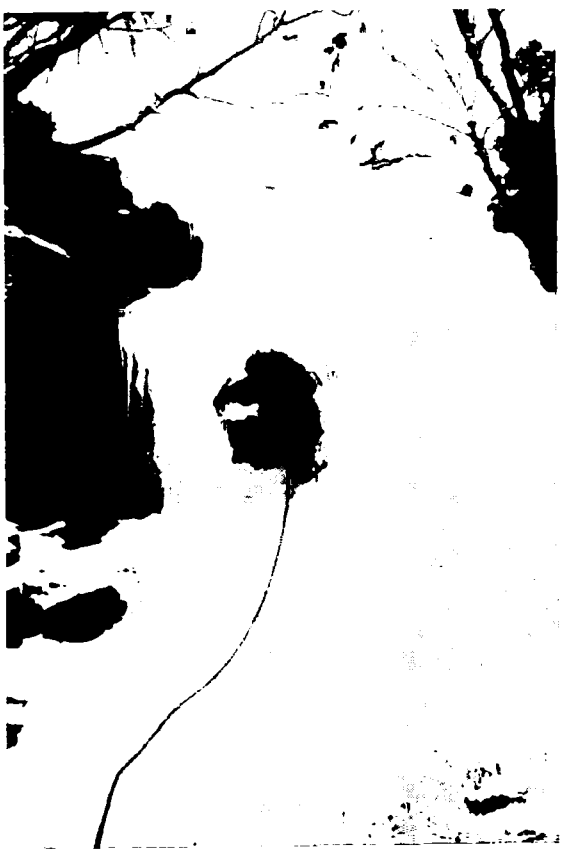
・青谷知己　他2名

前日までの強風がピタリと止んでツアー日和りとなった。一昨年の苦渋を思い出しつつリフトを乗り継ぐ。今年は例年にない大雪で、気温もまた低い。10人程のパーティのあとを追って樹林帯にシールをきかせる。モンスターの背が低くなると稜線である。見覚えのある広大な雪原が広がる。今日ツアーが始めてという同僚の2人もゲレンデスキーにシールをきかせて続いてきた。天狗岩まで快調に登り、西吾妻小屋に向けて、西吾妻山の山腹を巻いていく。一時ホワイトアウトになり、方向がわからなくなったが、雪面から顔を出すツアー標識に救われて下降点を確認する。やがてみるみる青空が広がり、飯豊、朝日連峰の白い輝きが見渡せるようになった。

下降ルートは随所に標識があり、これを見落さぬよう樹林帯を滑降していく。上部は急で、登山道のある尾根を巻くように斜滑降キックターンで進み、緩くなってシュテムターンに移る。もう安心してゆっくり昼飯をとり、白樺林の若女平にすべり込む。天気は快晴となり、大休止して我々だけの雪原に大満足する。広い緩斜面を横断するとやせ尾根になり雪庇に注意して横すべりでいくと、あとは杉林に突入。横ずりターンで快調に進み、最後の斜面に弧を描いて白布温泉の有料道路に滑べり込んだ。そのまま温泉につかり、楽しい旧をしめくくった。

一昨年のツアーの際には、スキーが全くの初心者。やはりある程度の技術をつけてからのほうが余裕が全く違うようである。

（青谷　記）



<8320　広河原沢　左俣　大滝>

1984年度　山行記録

1984年度　役員

会長　……　中村正俊
C.リーダー　……　青谷知己
学生リーダー　…　吉田浩之
西高係　……　宍戸泰成
　　荻田哲也
会計・例会…　浜田和康
記録・会報…　山田裕久

8402
上州武尊山スキーツアー

・1984年4月15日
・青谷知己，山田裕久

宝台樹スキー場 430 － 手小屋沢 830
－ 1035 沖武尊山 1130 － 1400 武尊牧場スキー場

今年はやはり雪が多いようで、水上駅周辺にも雪が残っている。宝台樹スキー場でツェルトにくるまって夜の明けるのを待ち、夜が白むと同時に出発する。道路を500m位進み、上の原山の小屋のところで道路と別れスキーをはく。名倉沢に沿って2時間位進み、左手の尾根へスキーを引いてつき上げる。尾根を越えて手小屋沢へと滑べり込む。今度はこの沢沿いに登っていく。やがて、まだシール登高に不慣れな僕は、時々直登できなくなり、斜登高、キックターンをくり返すようになる。雪が堅かったのでつば足に切り替え、しばらくで沖武尊山頂に出る。山頂はもう一部地面が露出している。春風のあたたかい陽気で、皇海から奥白根、越後谷川、苗場と360°の展望が得られ、僕達2人だけのすばらしい春の山の一時であった。武尊山頂を後にして、武尊牧場へと降る。中ノ岳の北斜面をトラバースして、次に尾根の南東面の長いトラバースに入る。稜線上には雪庇がかぶさり、あまり気持ちのいいものではない。さらに、同じ方向への斜滑降は山足ばかりがいやに疲れる。1958mピークの少し手前で尾根に戻り、広い斜面を快適にすべり最後の少しの登りの後、武尊牧場スキー場へと滑べり込む。大雪のおかげでまだスキー場が開いており、親切な高橋の方々の車で沼田まで乗せていってもらえた。感謝の次第です。今回のツアーは雪はザラメ雪のシャーベット状だったが、意外とすべりやすく、楽しい一日が過ごせてとても満足だった。

（山田 記）

8404
大源太山～足拍子岳

・1984年5月3日～6日
・（先行パーティ）
遠藤彰，青谷知己，萩田哲也，浜田和康，西入利雄
（後発パーティ）
河合秀樹，吉田浩之，加藤彰彦

今年の五月合宿は、新人主体の山行となるため、縦走＆岩登りという形で、画い優れた足拍子周辺を選んだ。総会後の酒の席では谷川岳～足拍子岳まで、一般縦走路をスキーを使ってなどと思っていたが、単なる縦走路では面白くなかろうと、大源太山に至る登川左岸尾根から足拍子までという険しいルートが選んでいた。2年の連中も一緒に行くというので、縦走隊は5人となった。なお、アサギ同人の会報に同尾根の記録がある。

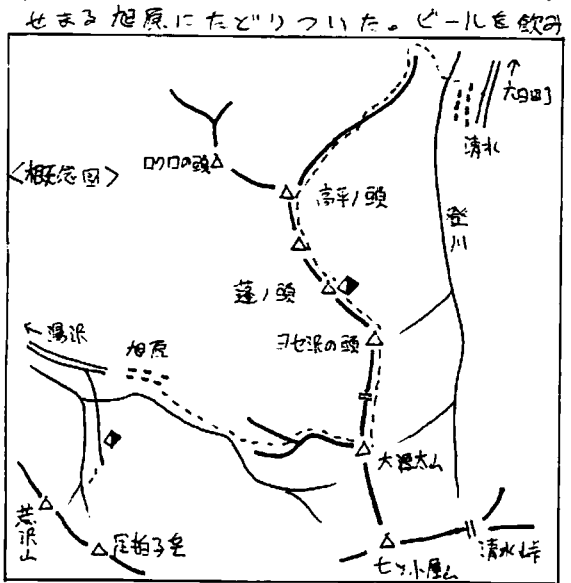
5月3日

いつもの夜行で六日町へ、青谷は学校の用事が済まず、臨時の夜行で六日町で合流する。しばらく仮眠の後、一番バスで清水へ入る。天気は予想に反して雨。何とも気勢が上がらず、清水であれこれ考えるが、意を決して出発。まずは高平より頭へ抜けるルートをめざし、登川を渡ろうと思ったが、雪融け水が多く、橋も流され対岸に渡れない。仕方なく引返し、清水から1km下流の橋より尾根を忠実に登ることにする。取付900。尾根沿いは今年の多雪にもかかわらず、さすがにブッシュが出ており、右側の残雪を拾って進む。しかし、一向にピッチが上がらず、2P進んでも、まだ、清水の堰堤の上である。ブッシュこぎと、不安定な雪渓が交互に続く。やぶこぎも、もっとひどいのを経験している我々には何ということもないのだが、萩田や西入らはブツブツいいながらも悪戦苦闘である。4P目でやっと高平の頭に出る。霧雨が止まず、視界もよくない。尾根筋はそれでも積雪が多く、早く天幕で暖まりたい気持ちを押えて2P進み、1320mピーク、蓬の頭

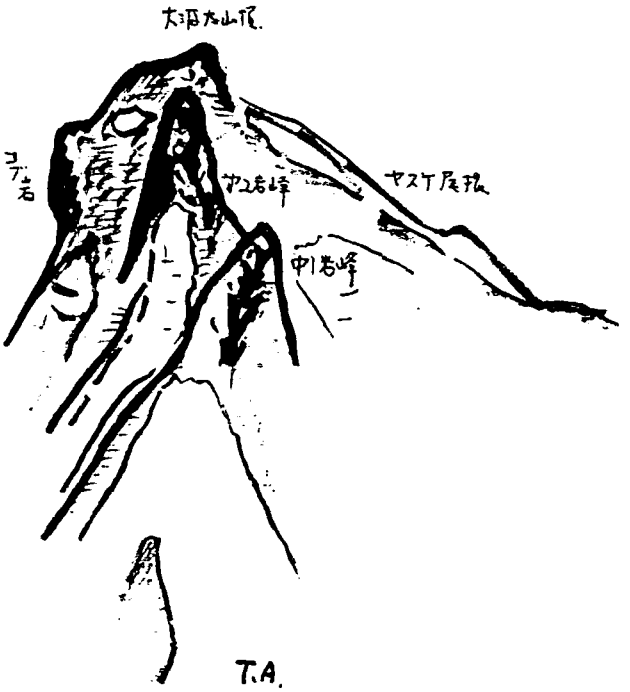
の頂上に設営する。16:30。

5月4日

今日こそは晴れるという期待に反して、朝になってもとまどい雨の音。6時頃になってやっと視界が開けてきた。やっと快適な縦走だと期待を持って天幕を出る。気温も低く、春山のような積雪量の尾根を快調に進み、ヨセ沢の頭へ。やっと青空が広がり始め、大源太山の急峻な山稜が目の前にそびえる。第一、第二岩峰が鋭い。ロルにてゼルバンをつけて取付く。しかし、見た目に反してブッシュを伝っていくと意外に楽に登れる。登る予定であった第一尾根や、3月に登ったコブ沼尾根を左に見る。第2岩峰の登りで40m、1Pザイルを出す。コブ沼と同高度の地点で遅い昼食。小ギャップにザイルをフィックスして越えると間もなく大源太の頂上である。周囲360°の展望をほしいままにする。やっとたどりついたというのが実感。記念写真の後、足拍子への縦走を破棄してヤスケ尾根を下る。途中より沢沿いに入り、シリセードですべりおり、北沢の河床におっという間にたどりつく。大源太川の右岸沿にさっぱりと疲れを感じつつ、夕暮せまる旭原にたどりついた。ビールを飲み



宿に泊まろうという誘惑を振りきって、後発隊との合流点へ、満天の星空の中たどる。林道に入って5分。さすがの雪の多さにダウン。林道脇に設営。



5月5日

先発隊は疲れで意気が上がらず、9:40になってやっと出発。遠藤はお昼寝。マイナー・メインリッジを目指すが、前手沢出合が11:30。時間的に無理と判断。しかも、ブロック雪崩が連発するには登る気がおきず、最も安全であろう、前衛スラブの右側に至るスラブを登ることにする。スキーをはいて登ってきた河合と、疲れの残る萩田はここで引返す。吉田－西入、浜田－加藤－青谷パーティで取付く。容易なスラブがワP。岩登りの雰囲気はまあまあ伝わったことだろう。前手沢との境界をブッシュ伝いに下降する。夕食はちょっぴりのコゴミ、後発が持ってきた、サラダ、おでん、チキンライス。そして、アルコールと、まれな豪勢さだった。遠藤下山。

5月6日

今日も快晴。昨日よりすっかりのんびりムードが漂い昼寝となるが、皆の尻をたたいて、対岸の雪の斜面に雪訓に出かける。裸足になっての徒渉のおまけつき。キックステップ、確保、コンティニュアス、グリセードと一応のメニューをこなす。食料を片づけて、3時過に天幕場を後にする。（青谷記）

8405
奥秩父 小常木谷

・1984年5月13日
・井汲重弘，河合秀樹，吉田浩之

余慶橋 705－719 出合－725 火打石谷出合 845 兆子ノ滝 920－1040 大滝 1200－230 綾線－430 余慶橋

今にも雨が降りそうな、曇り空の下、井汲の"ピアッツァ"で丹波に向う。余慶橋付近の河原にはまだ残雪があり、かなり寒い。橋の脇から丹波川におり、左岸をへつり出合へ。倒木のあるゴーロをしばらく行き、道が横切る所で火打石谷を右に分ける。この先の小滝で河合が釜の中に肩までつかってよじ登る。さらに、吉田は先の小滝の滝つぼのへつりでバランスをくずして釜にドボン！雨岸がせまって、いよいよ、置草履の悪場に入る。入口の兆子の滝で初めてザイルを出す。吉田がトップで左壁から取付き、中央部のバンド付近で瀑水を浴びながら右往左往しつつも、水流の左から落口に至る。不動の滝は、右の枝沢のナメ滝から巻く。大滝は下段はなんなくノーザイルで、上段は井汲がトップで左壁の怒なツルッとした所を登っていく。悪場もすぎ、二俣を左のナメ状の本流を行き、左から入る猿沢を登る。岩が脆く、浮石が多い。最後は折々雪の残ったやぶをこぎ、岩岳尾根にばっかり出る。帰りは岩岳尾根をかけ下る。（河合記）

8407
奥秩父 井戸沢椹谷

・1984年6月16日～17日
・溯田和康，山田裕久，西入利雄

6月16日（くもり 一時 小雨）

荒沢出合まで一気にタクシーで入ってしまう。これで大幅にアプローチがかせげた。出合には4台ほど車が止まっている。ぼく達も今度は車できたいものだ。井戸沢の出合には林道から踏み跡がついていて簡単におりることができた。いくつか小さい滝はあるが順調にキンチヂミにたどりつく。ここで上流から下ってきた釣師に会う。キンチヂミの悪場は一度に巻けるようだ。僕達はガイドの通り、アップザイレンで8m滝の上におり立つ。続く3mの滝は、浅い釜の中を渡ってとり付く。次の滝のへつりが悪かったが、残置シュリンゲにたよって通過。このあとはたいした悪場もなく、溯行を続ける。やがて椹谷出合と思われる地点にたどりつき、この先にあるはずの岩小屋を探すがみつからないので、やむなく河原にビバークする。その夜は谷をおりてくる風のため、寒い夜であった。ところで、実をいえば、私達の当初の計画は井戸沢であったのである。それがなぜ椹谷になっているのか、私達は情けないことに出合いのかん定をつまちがえていた。つまり、現在地は、ホラノ貝窪とアザミ窪の合流点だったのである。しかし、そんなことは知らぬ本人たちは本日の行程が意外とはかどっていることに満足して寝ていたのである。

（三峰口 1132－1225 荒沢出合 1235－1340 井戸沢出合 1340－1515 キンチヂミ 1520－1730 ビバーク地．）

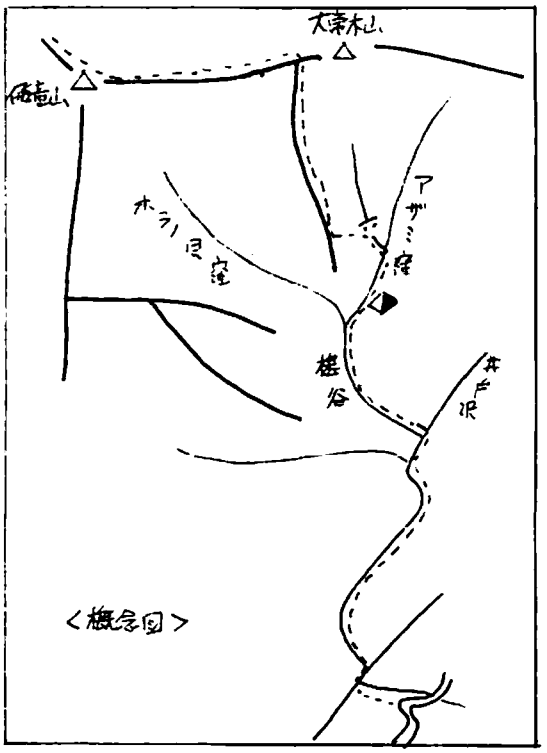
6月17日（くもり 時々 はれ）

今朝、起きた時は寒さのせいか、体のあちこちが痛かったが、朝食をとるとそれも消え、元気に出発する。少し行くと、水量比が

にしの出合となる。前新左衛門窪にしては近すぎるので、おかしいおかしいと思いながら、滝がなくなることもあるにちがいないと左の沢に入る。やがて10m位の中々見事な滝が現われる。これが10mの滝かなと思ったが、巻き道がわからない。左岸にあるはずだが、いけそうにないので右岸を高巻くことにする。このあたりになって、さすがに僕達も沢をあやまったことに気付いた。しかし、ここで出した結論も先の出合が、アザミ窪とホラノ貝窪との出合で、自分達は今ホラノ貝窪にいるというまたまた間違った判断であった。本流にいないと思った僕達はもう完全に遡行意欲を失い、このまま尾根に登れば鷹巣山と雲取山の間の主稜線に出るだろうと考え、ひたすらやぶをこいだ。だいぶかかってやっと尾根についたが、あるはずの道がない。もうパニックである。自分達がどこにいるのやらさっぱりわからないのである。下ることなど思いもよらず、僕達はただただその尾根を南へと登った。天気も悪くなってくる。もう泣き出したい気分だ。きっとこれが遭難の一歩手前なのだろうなと思いつつも、時刻の早いことに元気づけられて少々にやぶをこぐ。(実はこのとき僕達は大菜木山から北東に延びる尾根上にいたようだ。)やがて1つのピークにたどりついた。赤いくいがうってある。ここから尾根は南東の方向に下っている。なんで主稜線にたどりつく前に下らなければならないのだろうと思いながら、ふっと右下を見ると、そこには道があった。やって来るハイカーに「ここはどこですか。」と何とも間の抜けた質問をすると、将監峠と鷹巣山の間だという意外な(僕達からすれば)答えが返ってきた……。こうしてまあ無事に帰ることができたわけだが、今回の失敗の原因は何といっても1日目に椹谷と本流との合流点を見すごしたことにある。この点については今だに不思議でならない。また、失敗を助長したのは、沢の中だからと地図、コンパスを見なかった自分達の怠慢さ、甘さであろう。

(山田 記)

(発 505－550 10m滝－1020 椹谷 1040－1110 鷹巣山 1125－1415 丹波)



<概念図>

8408
コーモリ沢，三ッ峠

・1984年7月1日
・松本 哲郎，青谷知己，西入利雄，武内

夜のうちに車で入れるところまで入り、幕営。翌朝、さわやかに目覚めてコーモリ沢の遡行に入る。ゴロゴロと大きな石が目立ち、水量は少ない。広めの沢で、新緑の下軽快に進む。1ピッチで一般道に飛び出し、左のゲレンデへ。休日しかも晴天の為、大にぎわいである。

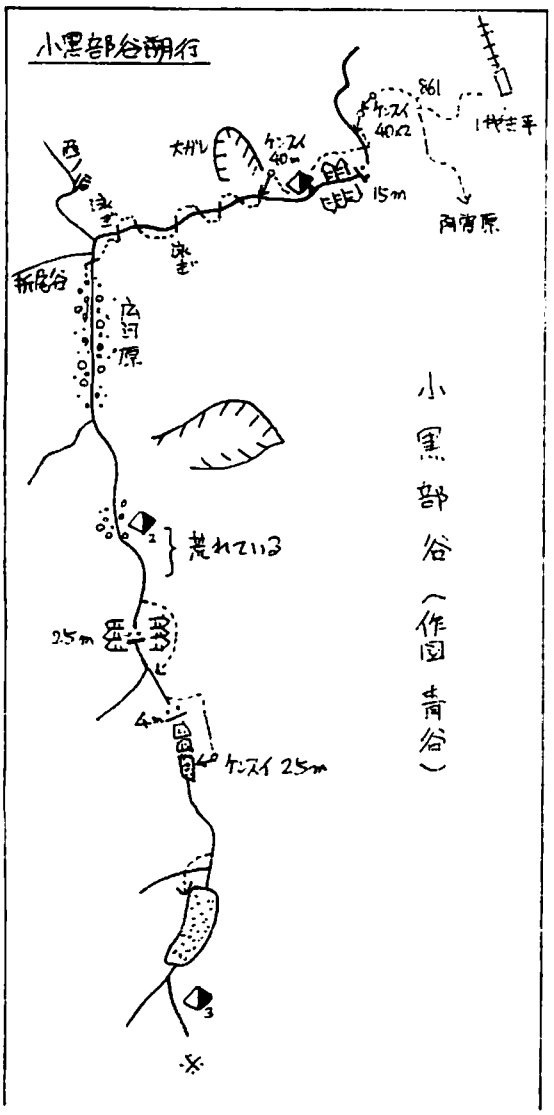
まずは草薮ルートから第一クラックへ。新人はクラックでの体の入れ具合に少々手こずる。次にNo.8一般ルートを経て上部へ。武内は、No.19クラックで苦闘しつつ抜ける。昼食の後、松本、西入は大根おろし、武内はNo.20クラックへ。大根下しはホールドもスタンスも微妙で非常に労力を費した。

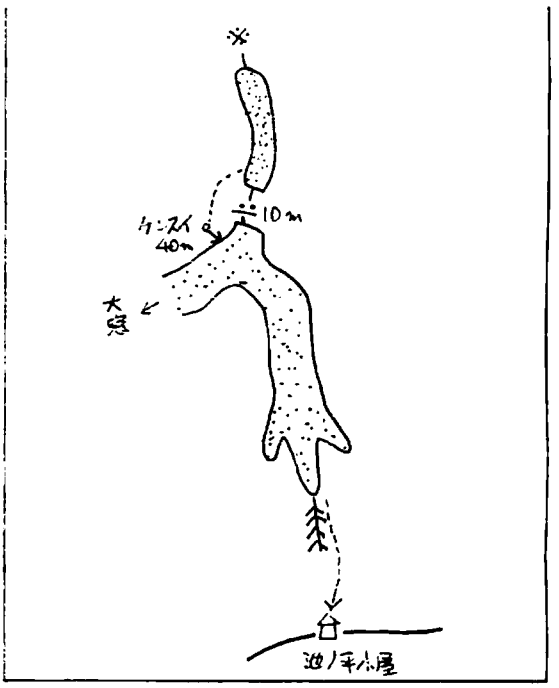
腕も疲れて、フリーが一通り終わると、三ッ峠頂上をまわって西面へ入る。三段ハング下部周辺で人工の練習。初めてのアブミに新人二

人は要領を得ない。しかし、Ⅳ峰は厳しかった。
流石に岩のメッカの三ッ峰だけにルートも変化に富み、充実した登攀となった。
（西入記）

8409
小黒部谷～剣岳定着

・1984年8月10～18日
・遠藤彰，青谷知己，河合秀樹，吉田治夫，荻田哲也，浜田和康，山田裕久，西入利雄，加藤彰彦，武内





8月11日（快晴）
けやき平 1005－1037 861m 1100－1440
小黒部谷 1530－1650 薄宮地

魚津駅で大阪からくる遠藤さんと合流。柳又に入る。わらじの宮内さんらとも一緒になる。黒部峡谷鉄道は予約していたが、早い列車に乗ることができた。欅平ではみ出した荷物を整理して最初の急登に入る。汗だく、双の一字ではやバテ気味。水平道が終焉に出た所で右手に下がる踏み跡に入る。送電線沿いに道が続くが、途中で消える。小黒部谷めざして降り始めるが、急な斜面となり、ザイルを出す。IP不安な中、遠藤さんが下降、小平地に出る。ここより浅いルンゼをさらにIPでやっと川床に下りることができた。それにしても暑さにまいって、水の何と恋しかったことか。

気分をとり直して遡行を開始する。30mほどたどって胸までの渡渉、左岸沿いにへつる。加藤がボロッと水の中。谷が右折すると、恐怖感を抱かせるような強烈な滝。選択の余地なく左岸を高巻く。途中より下降地点を探すが、水流激しく、ようやく下りたところで、よい砂地があり、第1日目の泊場とする。釣果はないが、盛大なたき火に

心もなごむ。

8月12日（快晴）

発 615 － 1450 広河原 1515－1533 幕営地

すぐ行き止まり、対岸に渡る方法をあれこれ考えるが、水流が多すぎる。というわけで最初から高巻きとなる。左岸の小台地をたどると、行手に大ガレがせまり、やむなく懸垂 40m、下が見えず不安な下降だが、ハング気味の岩を下って、河床に出る。人数が多くてはかどらないため、前四人が先発する。すぐ対岸に徒渉、ザイルをフィックス、右岸の台地をたどる。後発が追いついた所でへつり気味にたどり、左岸、右岸と徒渉を繰り返す。天気もよく苦にならないが、ピッチはなかなかはかどらない。中州で昼食。ここよりさすがに徒渉もできなくなり、左岸に渡った後、飛び込みとなる。1・2年は初体験。こちらはニヤニヤ。様々な飛び込みが見られた。更にその先で同じ場面となったが、楽しさからか、連中が率先してリードしていた。ここで西ノ谷、竹尾谷を入れ、水量は半分程になる。激しい徒渉とはうって変って、おだやかな流れとなった。広河原となり広大な河原が続く。えんえんとたどり、両岸がせまってくる手前で打止めとする。

8月13日（晴れ）

発 625 － 920 25m滝上 930 － 945 4m滝 1015 － 1230 小黒部谷 1330－1450 幕営地

登山体系ではまず10mの滝に出るはずだが、一切に滝はない。両岸の荒れはすさまじく、埋まったものと思われる。まとまってくると前方にチョックストーンをもつ25m滝となる。とうてい登れず右岸を高巻く。下りてまもなく、小滝を従え、その先にズタズタの雪渓が現われる。とても行く気にならず、これも右岸を高巻く。ルンゼ状をたどり、つまった所より、右手のもろい岩場をたどってブッシュ帯に入る。トップはどこまでも直上していくが、途中よりトラバースが正解。安定した所で一服したところが、西入がザックを落とすチョンボ。遠藤さんが滝ツボに沈むザックを拾い上げてきた。一時肉のワス。ペナルティは水をいっぱい吸ったザックていうわけ。上部は雪渓となり、シュルンドに25mの懸垂で降り立つ。スノーブリッジをくぐりぬけて大休止となる。さすがに新人に疲れが見えてきた。ゴーロ気味をしばらくたどるとスノーブリッジ。右手の枝沢をからむように雪渓上に立つ。この雪渓をたどり、切れた小台地を幕営地とする。

＜小黒部谷の徒渉＞

8月14日（くもりのち晴れ）

発 730 － 1000 大窓雪渓との出合 1100 － 1300 池ノ平小屋 1420 － 1620 真砂沢

あとは雪渓をたどるだけ、と思ったのが大間違い。しばらくたどると、大きく切れている。またしても高巻き。草付きよりかん木帯に入ってトラバースするが、このヤブこぎは苦しかった。又しても、懸垂 40mで大窓雪渓下の雪渓上に降り立つ。全員の集合を待って、最後の雪渓登りとなる。小屋は見えども近づかず。2P まるまる3かかって池の平に飛び出す。全員、精魂つきたという感じで、びっくり返ってしまった。

これから池の谷山を越えて三ノ窓へ行く予定だが、とうてい両張れそうになく、ここで張ろうというのをなだめて、真砂沢まで行くことにした。

その後の真砂沢定着での小屋への貢献度は、今までにないものであったことだけは確かである。また、三ノ窓へはるばる来てくれたN氏には、申し訳ないことをした。

こうして小黒部谷を遡行することができたわけであるが、徒渉あり、泳ぎあり、高巻きあり、懸垂ありで、それなりに面白かった。1、2年の連中は、大きな谷は初めてでもあり、その良さも少しはわかってもらえただろう。ただ中流以降は荒れており、ブーロ歩きに終始したのは残念だった。（青谷 記）

< 小黒部谷 25mの滝 >

剣定着

8月15日

○八ッ峰六峰Cフェース剣稜会ルート～上半分終了
・青谷知己、山田裕久

発 825－1040 取付 1100－1245 終了 1315－1435 八峰の頭 1455－1640 帰幕

○八ッ峰六峰Dフェース富山大ルート
・遠藤、吉田

スラブ登りの楽しさとリッジの高所感がありなかなか楽しいルート。Cフェースには青谷・山田のパーティがいるが、登攀中は見えない。3P目の最後に少しかぶり気味のところがあり、そこはむずかしい。あとは快適に登れてDフェースの頭に出た。青谷・山田パーティはずいぶん早く抜けたらしくて、3P目を登っている所でCフェースの頭にいる所が見えた。

○本峰北壁 LⅠ稜
・浜田、武内

○本峰北壁 LⅡ稜
・荻田、西入

8月16日

○源治郎尾根 I峰下部中央ルンゼ
・遠藤・山田

取付 1025－1505 終了 1535－1722 帰幕

先行パーティが多人数でなかなか進まず、そばにつき合わされて、ずい分と時間がかかってしまい、上部をあまら

めざるを得なかった。少し残念であった。

8月17日

○大峰 Aフェース 魚津高ルート
　　Bフェース 京大ルート
　　Cフェース RCCルート

・浜田・山田・西入

急な長次郎雪渓をつめながら望む四峰のフェース群は豪快で、さらに取付まで来ると圧倒的な迫力があり、登高意欲が湧く。

取付からいきなり少しきびしい凹角を登ってテラスに出る。ここで他パーティと交錯し、次のカンテからクラックまで手間取る。しかし、上部は快適なリッジ通しで、ほぼ標準時間で終了。Aフェースの頭からは、Bフェースの全貌がよく見え、なかなかの高度感だった。

現在しているAフェースを横目に見ながら取付点へ。下部はバンド沿いで特にどうということもない。2P目からはブッシュがでてきて、壁の斜度もきつくなり、運動靴のフリクションで登る所もあった。Aフェースとは違い、こちらは山靴でもしんどそうだ。上部は素晴らしいリッジの登攀。西側が切れ落ち、天気は快晴。快適なルートとパノラマと高度感に剣の醍醐味が十二分に味わえた。それでもV四のコルから荷物のデポ点に戻った頃には疲労感がどっと来た。山田はここから剣本峰へ向った。

流石に三本目となると惰性の感がある。本当は剣綱会ルートをやる予定だったが、取付点からルートファインディングを誤ったため、RCCルートもどきになった。全体的な印象はBフェースをやった後のせいか、今一面白味に欠けた。下部のスラブ状のところがちょっといやらしかったぐらいで、後半はハイマツが随分とでていた。3時をまわってガスも出て来ていたため、上部のリッジでもあまり高度感はない。傾斜が大体は緩やかで、最後は何でもない草付をつめていったCフェースの頭だった。

（西入記）

○源次郎尾根 平蔵谷側 中谷ルート

・青谷・吉田

源次郎尾根の下部と上部を結ぼうとして朝早くテントを出る。しかし、それは取付で早くもくずれさった。取付を間違え、そこで2時間以上を無駄にしてしまったからだ。ルートに入ってからは快適で、人工とフリーをミックスして登るのは楽しい。特にむずかしい所はなく、落石の心配も少ないので気分もよい。

（吉田記）

8412
守門 大雲沢

・1984年9月15日～16日

・松本哲郎、青谷知己
　田中・関根・小林（わらじの仲間）

森下さんが守門の谷に逝ってから一年。守門山への集中山行が企画された。西朋からも多くの人数を出す予定だったが、西高の沢登りと重なり、また、中尾さんの結婚式などもあって、結局、松本と2人になってしまった。わらじの仲間は秋の集中山行として20数名の参加を見て、ほぼ守門を巡る沢をひと通り遡行された。14日の夜行で発ち、15日は各パーティが別れて山頂で合流。16日山より下りて本高地沢遭難地点にて御家族を迎えてレリーフの設置、追悼を行った。

詳細は遺稿集を参照してもらうとして、我々のたどった大雲沢だけを抜すいしておく。レリーフは、本高地沢の沢筋の大岩にすえつけられた。西朋の諸氏にも一度訪ねてもらいたいと思う。

大雲沢は登山体系にえらく難かしそうに書いてあるが、そうでもあるまいと たかをくくって登ることにした。

小出よりマイクロバスは、エラオトシ沢出合直前の堰堤まで入る。朝メシをほおばったのち、沢に入る。しばらくでエラオトシ隊と別れ、釣師を気の毒に思いながらも抜いて、大雲沢に入っていく。しばらくゴーロをたどると両岸が圧迫し、強烈なゴルジュとなる。しかし、沢床を石が埋めているため通過は容易。まもなく布引ノ滝が優美にすべり落ちてくる。日本海側の火山性の山の沢は、その基盤となる凝灰岩層を深く浸食しており、苗場山周辺などともよく似ている。

しばらくで取水口の堰堤が立ちふさがりこの人工物のために、下と上で二回泳がされるはめとなる。田中さんの泳ぎはなかなかのものだ。雪塊の残る手で一服。右岸より沢が入る。この先右に屈曲し、左折するとゴルジュも本格化する。左岸より二本滝がすべり落ち、へずりと泳ぎ（あとで足がたった）を交えて進むと、巨大な雪壁が立ちふさがる。冷蔵庫の中にいるようなもので、体のふるえが止まらない。右岸、雪穴の中と進路を求めるが、いかんともしがたく退脚を与儀なくされる。さきほどの手まで下降、ラーメンなどで体を暖めてのんびりする。右岸の沢をしばらくたどり、30m程の滝下より左のブッシュにとりつき、あとはひたすらやぶをこいで登山道に登りつく。上部から見ると雪渓部分が上部では容易に見えたが、もう一度やるかと言われても、もういいやという感じである。今日は、わらじの方々におまかせであった。緊張感も解けて、途中の水場で大休止。稜線をたどると頂上付近の草原に導かれる。おだやかな山稜、森下さんが立ったであろう山頂。この美しさをして、何とも残念に思う。　（青谷記）

付：森下直夫遺稿集より転載

〈布引ノ滝 30m〉

8413
西上州 物語山

・1984年9月24日
・青谷知己　他2名

その特徴ある名前、また、かつて森下さんが伝説を秘めたメンブ岩を登ろうといっていた事もあり、一度登ってみたい山であった。

標高もチョイ余り、ドライブがてら一気に頂上を極めた。林道終点より1時間20分程のコースタイムだが、これをJOGで40分。あとの2人は頂上でのびてしまった。頂上は狭く、展望もきかずぱっとしなかったが、北面に夕陽に輝く妙義・浅間、そして眼下の山村が美しかった。下りはマラソンで20分。

物語山北面には、阿唱念の大滝を持つ阿唱念沢他いくつかの鋭いくい込み

ぐりこんだ時には、寝ること以外に何も考えられなくなっていた。

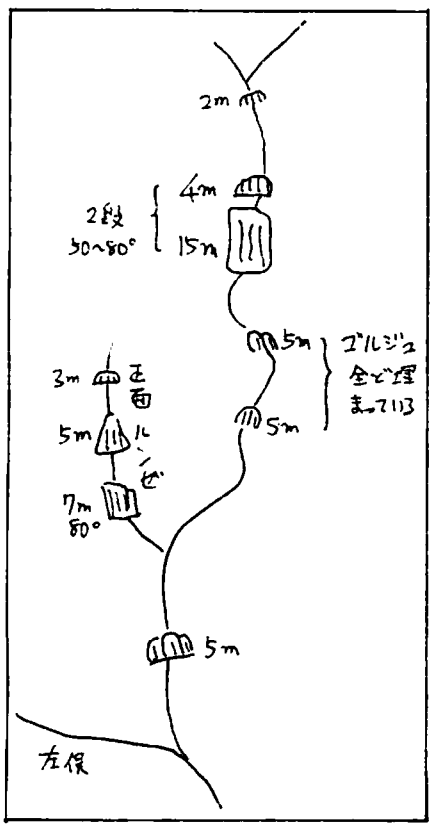
12月31日

雲1つない快晴。権現の頂上もすぐそこである。2Pほど雪稜を登るとバットレスの取付である。しかし、荷物が重くて後ろにひかれて、なかなか登れない。吉田がやっと1P登り、あとすこしの所で青谷にバトンタッチ。しかし、一ケ所どうしても抜けられず中退。権現岳東稜を下ることにする。目前すぐできて頂上を踏めないのはくやしい。東稜のナイフリッジを慎重に下り、出合小屋で後発隊と合流した。今までの疲れをふきとばすように大みそかの夜を楽しんだ。　（吉田記）

1月1日

権現沢右俣下部

・青谷，吉田，浜田，西入，加藤



正月の朝はド快晴。今年の初雪では沢をつめるのもしんどい。新人らは2日より天狗尾根を登るとして、氷登りを右俣下部で練習することにした。

右俣に入るとすぐ5mの氷瀑。一昨年より発達よく、2年がトップ、1年が確保で好きな所を登る。正面ルンゼを左に見送って右に入る。ゴルジュ帯の雪渓を期待したのだが、あらかた埋まり、名残りの氷床が見えかくれしている。左折し、右折したところにみごとな青氷の滝がかかる。左側は傾斜強く、ルもしたたっているが、中央から右寄りは容易。ここも2年トップで楽しく登らせる。満足。ここより上部は雪がつまっており、ここで打切りとする。けっこう疲れた様子なので正面ルンゼはやめようかとも思っていたが、合図に迷っているうちに取付に入っていく。正面ルンゼ出合の滝は傾斜も強くきびしい。一昨年苦労して越えた覚えがある。一番手浜田、奮戦空しくギブアップ。二番手吉田がクリアーする。これを見て西入・加藤は戦意喪失。そこで青谷がダイレクトに強引に登って幕となった。

右俣下半部は、赤岳沢出合をベースにしたとき、氷登りのトレーニングとして最適であろう。　（青谷記）

8423
妙義 裏谷急沢

・1985年1月13日
・青谷知己，吉田浩之

取付 810 ― 頂上 1210～1310 ― 大遠見峠 1420 ― 車 1600

妙義の沢へは一度冬季に行きたいと思っていた。大トケ沢は様々なガイドが出ていて、あまりに新鮮味が失われてしまったが、氷遊びには十分なものがある。

レンタカーを駆って、出合付近で仮泊。冷えこみは十分。枝沢もよく氷っている。

F1 8m、左手に吉田トップでザイルを伸

がある。わらじの仲間が踏査している記録を見るが、詳細は知らない。しかし、冬季訪ずれば、意外な氷瀑登りができるかもしれないと何となく気になっている場所である。

——・—— 氷瀑さがし あれこれ ——・——

ⓐ この山行きと前後して修学旅行の引率として、実志賀山にハイクをして、吾妻川原湯～軽井沢と巡ってきた。吾妻川原湯は温泉もよく、また、不動滝（40m位）や吾妻峡谷めぐりができる。こりゃもしかすると氷るかもしれないと思っていたが、岩と雪 106号には、アイスクライミング特集として、ナントこの滝や峡谷沿いの滝がゲレンデとして紹介されていた。オドロキとともに、同じ発想をする人間がいるもんだと妙に感心した。

ⓑ 峠の釜メシで有名な横川を通るたび、妙義の奇怪な岩峰が目に入る。よく見上げると、すぐ右上に大きな滝が目につく。いつの頃からか頭にこびり付き、地図を見て鍵沢と知る。特に沢としても紹介されていず、登山道もついているが、冬はあの滝も氷瀑に…。と期すものがあった。初春見れば氷にも見える。果してこれも岩と雪に紹介されてしまった。

ⓒ 荒船山周辺も最近人の出入りが多くなってきた。これも森下さんに連れられ、幻の大滝とやらを相沢にみつけ、冬季を期していたものだった。果して、求道心の連中が先鞭をつけ、わらじの仲間も入っている。もう一つ奥の大滝はどうやら登られていないらしいが、これも風前の灯であろう。

今季、どういうふうに記録が出るか楽しみにしているところでもある。それとも自分で……？

（青谷記）

8414 蓮峠～谷川岳

・1984年9月24日
・浜田和康 他1名

9/23.24は連休だったが、23日は都合でつぶれ、24日がヒマになり、友だちに連絡してその3時間後には電車の中という山行だった。

AM 3:10　土合着、用意してのんびりと発。
AM 7:30　蓮峠着。朝食とする。天気はエマ。道のわきの岩で遊びながら、散歩気分。
AM 11:00　一ノ倉岳着。あまりに気持よさそうな草の斜面があったので2時間ほどトカゲときめこむ。
PM 5:00　土合着。　（浜田記）

8415 大白沢、アサヨウ沢

・1984年10月7～10日
・浜田和康

10月7日

9:30　砂子平着。いい天気と風景にしごくご満悦。かご渡しも初めての経験であった。釣りをしながら遡行を続ける。
13:50　シロウ沢出合着。雨が降り出し、釣果も20cmほどの岩魚1匹で気分悪し。
不明　クロウ沢出合着、幕営。

10月8日

9:15　今日は核心部。気をしめて発。
9:50　アサヨウ沢は2段15mの垂直滝となって合する。右岸を巻く。この上部はゴルジュが続き時間がかかる。
12:30　3.40mの側壁が右岸からかぶ

さるようになると、15mの滝が現われる。立派な滝だ。無理をせず戻って巻く。

1440　二股は右に進む。しばらく行くと、3・4人ほど入れる岩小屋あり。次の二股を左に入ると、なおも7〜8mの滝がいくつか現われる。

1700　予想外に時間がかかり、伏流したところで幕営。

10月9日

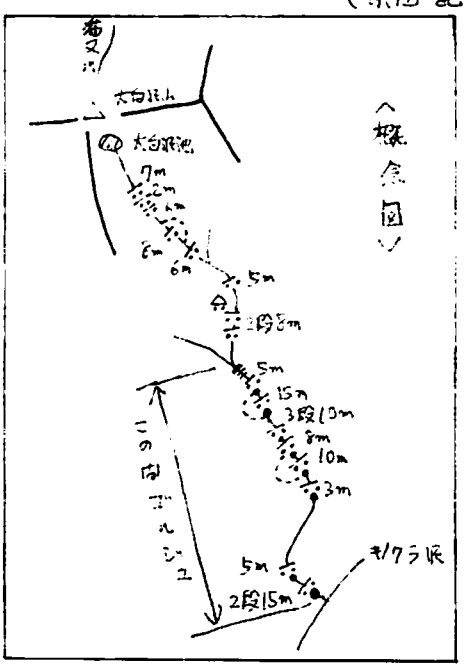
800　発。

820　大白沢池着。水面は波一つ立てず、大白沢山と浮かぶ小雲を映しだしている。地上の楽園といっても、それに恥じない静寂境だ。

950　大白沢山着。尾瀬方面の展望にすぐれ、なかなか良いピークだ。

1120　外田代着。

1440　山ノ家着。今回の山行は事実上ここで終わり、10日は尾瀬散策とする。（浜田記）



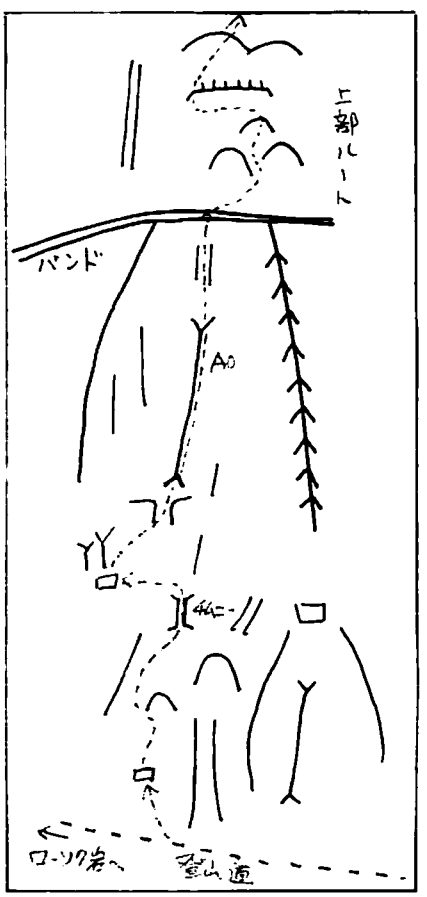
8416 西上州二子山

・1984年10月24日
・青谷知己，山田裕久，武内

久々の早朝発。紅葉の二子山で岩登りを楽しむ。一汗かいてローソク岩にて人工、フリーと足慣らし。昼食後一峰フェース中央稜下部・上部ルートとつなげる。

下部クラックルートは2P目、スッキリしたクラックを頭を使いながら登るピッチで、残念ながらボルトの頭にのるA0が一ケ所出てしまったが、思い切り楽しめて充実している。初めてEBシューズをはいたが、岩登りの楽しさが一ランクわかった気分であった。

（青谷記）



8418
小室川谷，大黒茂谷

・1984年11月2～4日
・吉田浩之 他1名

11月3日

前夜車をとばして三条新橋まで入る。本当は小室川谷の出合で幕営の予定であったが、まわりがまっくらなこともあり、三条新橋をいつの間にか通りこしてしまい、時間的に遅くなったこと、車の中に荷物をばらばらにおいておいたので、まとめて歩き出すのがおっくうになった等の理由により、車のわきにテントをはることにした。

次の日まあまあの天気である。林道を歩いても歩いても出合につかない。いつの間にか出合を通りこしてしまい、大黒茂谷の出合まできてしまった。ここで予定を変更して大黒茂谷を登ることにした。たいした悪場はなく、すぐに広いゴーロに出る。そこからは中程度の大きさの滝が少し続く。つらをたべながらゆっくり登ると大菩薩嶺と丸山峠との間の道に出た。そこからのんびりと幕営地に戻る。そこでもう1人と合流。今日はスキヤキパーティーだ！

11月4日

前日さわぎすぎたのがたたってか、寝坊してしまい、小室川谷を遡行しはじめたのは10時すぎ。しばらく歩くと5字峡である。3段8mの滝は1段目を右岸から高巻いてそこからアップザイレンして沢に降りる。そのあとの小室の渕を右岸を巻くと、またゴルジュ。ここの小滝で足をすべらし、滝つぼにボシャン。びしょぬれランチとなる。上部はナメが連続するはずだが倒木がひどくて右の尾根に逃げた。やぶこぎをやって道に出た時にはもうタ暮れ。富士山が夕焼けをバックにして真黒くうつったのは感動的だった。

（吉田 記）

8422
八ヶ岳 冬合宿

・1984年12月28日～1985年1月3日
・青谷知己，吉田浩之，浜田和彦，西入利雄
加藤勲彦

12月29日

<u>権現沢左俣</u>

・青谷，吉田

冬合宿だというのに2人だけで清里の駅からタクシーを飛ばす。タクシーを降りるとヒヤーッとした冷気で一気に目がさめてしまった。

歩き始めから雪があり、3Pで出合い小屋につく。そこまでも、ひざあたりまで雪があるところがあり、これから先の雪の多さは想像できる。赤石沢とわかれて権現沢右俣との分岐でアイゼンをつける。すぐに短いゴルジュが現われるが、その中の小滝はぜんぜんたいしたことはない。そのあとの8mと15mの滝の下部が雪にうもれ、難なく越える。ここからはひたすらラッセルの世界。ももあたりのラッセルにあえいで後大滝手前にテントをはることにする。

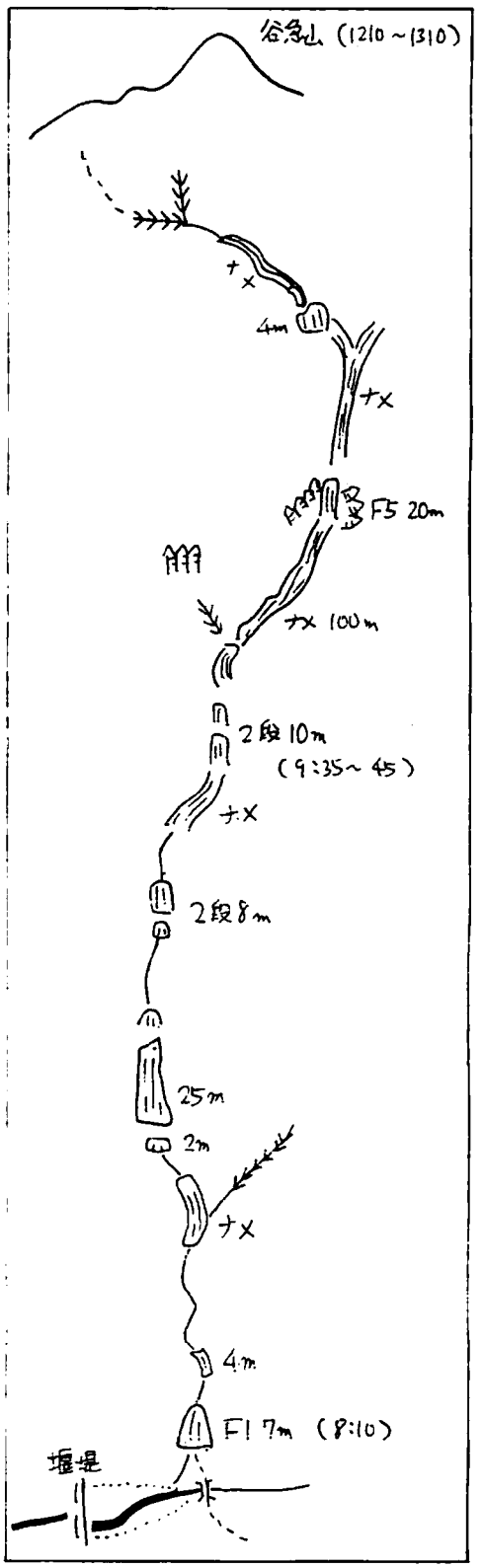
12月30日

いよいよ今日は大滝である。大滝はすぐそこである。そのはずであった。しかし、最初から腰あたりまでのラッセル、時には胸ぐらいまでにもなる。大滝は目の前にあるのだが、なかなか近づけない。やっとのことで大滝について一休み、青谷がトップをいく。まず左側の氷のベットりついた所から取り付きやや右へまわりこんで落口近くでまた左へ絞って抜けた。途中、アイスハーケンを3本使用。抜けた所でランチにする。ここからはひたすらラッセル。2段15mの滝が氷柱となっていた他はすべて滝もうまり、時には背たけを越えるほどのラッセルに苦しみながらバットレス方面の尾根に出た時は日も暮れ、もうバテバテだった。不安定な所にテントを張り、テントをザイルでしばりつけても

ばす。道路から見えるため、通りがかった高崎のK氏が、さかんに写真を写してくれる。写真の送付をお願いしてから先に進む。下部はしばらくゴーロ気味だが、時折現われる氷床は心地良い。右に枝沢を返ると2段25mの氷瀑。今度は青谷が落葉をかき分けて取付き、中央を快速に越える。上部は小さな氷瀑が連続する。小休後、2段10mの滝瀑を軽くクリアーすると、一面氷滑となる。そして、その奥に問題のF5が垂れ下がっている。柱状節理を発達させた溶岩に懸かるもので、上部10mは垂直な氷柱となっている。氷柱の下まで行って引き返す。それでも吉田は登ると頑張るが、結局あきらめ、左岸より高巻く。ここより氷のすべり台がえんえんと続く。途中4m程の茶色い氷瀑を越えて、更に氷をたどると、さしもの氷登りも尽きて日の当たる稜線へ飛び出す。右へ5分程たどると谷急山頂であった。西上州の山々が新鮮な角度で見渡せ、久しぶりの山頂で大満足する。

下山はどうせならと、大遠見峠を経由することにする。やせ尾根で意外とアルバイトをさせられるが、素妙義の沢などを偵察しながら行く。峠より道も判然とせず、並木沢左俣を下り始めたが、折よくつけかえの道をみつけ、並木沢の枝沢にかかる氷瀑を物色しつつ、車まで戻った。並木沢も氷登りは期待できそうである。

夕暮れにせまられたが、ついでにと、荒船山相沢右岸の氷瀑を遠望してから帰宅につく。　（青谷記）



< 裏谷急沢 F >

8424
丹沢 玄倉川 石小屋沢

・1985年2月11日
・青谷知己，松本哲郎

出合 900 — 稜線 1300 — 大石山 1320～1400 — ユーシン 1430

今年は2月に入って早くも春の気配。氷登りは無理だろうと思いつつも、一縷の望みを託して出かけてみた。久々の松本との山行。嫁さんに申し訳なく思いつつ、松本宅を早朝車で出発する。望む丹沢の北面は雪が白く輝いているが、近づくにつれ、気温も高く、望みは薄かみえてきた。丹沢湖より玄倉を経てユーシンまで車を乗り入れる。一応装備を整えて出発。ユーシン沢沿いの道に出て、20分程で石小屋沢出合となる。今日の目的はサンザ沢なのだが、もう氷も期待できず、地下足袋もなく、水量が少いという言葉にひかれて石小屋沢に変更する。沢登りに慣れぬ登山靴。最初の8m滝で、わらじであれば一歩水を歩けばすむものを、へつって片足をつけ、次々に出てくる滝も、頂登が見えるが、左右におどおど高巻いていく。気温も高く、日も射して、楽しい沢登りとあいなった。途中15m級の滝でザイルを出したが、すべるもいやなので青谷はボロアイゼンをつけて遡行する。なごりの氷片を見送って源頭。ガイドには右の尾根に取り付くとあるが、つめのガレを登って手ぢか小尾根にあがり、シカ道をたどっていけば、やがてまき少しで道に出ることができた。

富士・箱根・愛鷹・伊豆七島・駿河湾等、久々の新鮮な風景を眺め、丹沢といえども気分爽快。大石山でのんびり周囲をながめ、石を拾ったり、屋の金星が見えないかと青空を眺めたりしてのんびりする。

ユーシンでも石を2,3拾い、氷登りはできなかったが、地学屋としては収穫があったような気分で満足する。

松本にケガさせなくてよかった。なんてね。

（青谷記）

8425
神楽峰 ツアー

・1985年2月24日
・中村正俊，青谷知己，浜田和宏，西入剛雄

みつまた小学校からキー場のリフトを乗り継いで終点に着く頃はガスの中だった。スパーティに遅れたてられるようにして出発。しょっぱなの樹林帯で、[illegible]がはがれて手間取る。比

数的に尾根が見わたせるようになると、斜度もでてきて、山スキーを初めてはく初心者2人は苦しむ。大汗かいて主稜線に出ると、たまにガスがとび、上越方面が多少ひらける。ここからわずかなアップダウンで神楽峰へ。2P弱だった。しかし、苗場本峰の遠さと自らの体力不足にうちのめされ、早々に引き返す。風強し。

下りこそ山スキーの醍醐味。新雪に思い思いのシュプール（というほどの立派なものではない）を描いていくが、板がもぐって重く、操作がままならない。それでも楽しみながらゲレンデまで戻り、和田小屋で正俊さんと合流して遅い昼食。あとは天気も快復して、かぐらスキー場で少々遊んでいく。

次回は是非、あの白く大きな苗場に登り、小松原湿原の方にも足をのばしてみたい。　（西入記）

8426
尾瀬 至仏山 スキーツアー

・1985年3月18～20日
・山田裕久，西入利雄

3月18日

念願の平ヶ岳へと振り切って出発するが、鳩待峠までの日射しの下、4Pも林道登りで早くも疲れがでる。結局、山の裾で幕営したのは5時すぎだった。

3月19日

翌朝、天気が悪い。吹雪とまではいかないが、視界が今一ない。猫又川二股までで、トレースをはずして少々迷う。あとは赤布に従って右俣をつめずに尾根をいく。

強まる雪の中、大白沢北面の幕営地に着いたのは、平住復りミットの10時半。とにかくいくだけはいってみることにしてアタックにかかるが、なかなかペースが上がらない。1P歩いて、天気と地図と時間と体力と装備に相談した末、ここ（白沢山手前の1918ピーク北側）で撤退に決定。名残り惜しいが、帰れなくなったらしょうがない。それからは室外すんなりと進み、（しかし、二股への下りはシールが凍りついたおかげで雪まみれになった）とうとう強引に山の裾まで戻ってしまった。この日は雪の中を朝の6時から夕の6時まで行動して至に疲れた。

3月20日

最終日は至仏をめっつけて帰ることにする。森林限界をでる頃から雪が切れてきて、しまいにはすっかり晴れ上がる。一面真白な急斜面の登高が続くが、背後の燧と右奥の平に励まされて進む。しかし、行けども行けども、次から次へとピークが現われ、ガックリくること幾多。よっやく3P歩いて9時半頂上着。白い山々がぐるりと見える。武尊に奥白根に燧に平に上越方面。それと名もしらぬ奥利根源流の連山。風強し。

いよいよ至仏を滑る。ムジナ沢源頭の大斜面にステップターンで華麗にシュプールを描いていく。雪質最高、天気最高。この至仏滑降だけで、来てみた価値はあったと思った。

眼下に小さかった山の裾小屋がみるみる近づき、至仏山頂から1時間でテントに滑り込む。あとは好天にのんびりとして、10キロの林道を滑りおり、バス、電車と最終で帰宅した。

（西入記）

都立西高 W.V.部報告

・1982年度山行総覧

山行名	期日	場所	参加者 3年	2年	1年	教員	西明
新入生歓迎会	4/18	奥多摩 大岳山	5	4	4		林(南),山野,岡田,萩田,吉田,
5月月例山行	5/4 ～ 10	奥秩父 雲取山～飛竜山	1	2	9		
6月月例山行	6/26 ～ 27	丹沢 表尾根～檜岳	2	2	7	2	河合
夏山合宿	7/22 ～ 28	北アルプス 白馬岳～鑓ヶ岳		2	5	2	河合,斎藤
春山偵察	3/28 ～ 30	八ヶ岳 天狗岳～赤岳		2			
沢登り	9/18 ～ 19	丹沢 水無川本谷,セドノ沢		2	9		松本(由),松本(健),井沢,宍戸,東山
11月月例山行	11/20 ～ 21	奥日光 女峰山		1	5		中野,宍戸,松本(健)
スキー合宿	12/26 ～ 29	戸狩スキー場		2	5		河合,宮崎
1月月例山行	1/14 ～ 16	奥秩父 瑞牆山～金峰山		2	5		河合
2月月例山行	2/23 ～ 24	奥日光 南白根山		1	5		井沢,宍戸
春山合宿	3/20 ～ 24	北ハル 茶臼～孫太郎岳		2	5		宍戸,井沢,宮崎

・1983年度山行総覧

山行名	期日	場所	参加者 3年	2年	1年	教員	西明
新入生歓迎会		奥多摩 川苔山					
5月月例山行	5/7～8	奥秩父 甲武信山～黒金山	2	5	2	1	山田,浜田
6月月例山行	6/4～5	丹沢 塔ノ岳～蛭ヶ岳		4	2		吉田,萩田
女子6月月例	6/25～26	奥秩父 雲取山		3	2	1	中野
夏山合宿	7/23～28	南アルプス 甲斐駒ヶ岳～農鳥岳	1	4	2	3	中野
女子夏山合宿	8/1～4	北アルプス 燕岳～槍ヶ岳	2	1	2		吉田
沢登り	9/17～18	丹沢 葛沢沢,源次郎沢		6	5		中野,東山,松本(健),萩田,浜田
春山偵察	10/1～2	南アルプス 白峰南嶺		4	3		
スキー合宿	12/26～30	黒姫スキー場		5	5		宮崎,松本(健),萩田
1月月例山行	1/28～29	八ヶ岳 編笠山		2	3		河合
2月月例山行	2/11～12	北八ヶ岳 蓼科山		3	3		宍戸,渡部
春山合宿	3/22～29	奥秩父 金峰山～国師岳		3	3		萩田,浜田

1983年度部員数

	1年	2年	3年	計
男	3	5	2	10
女	2	1	2	5
計	5	6	4	15

・1984年度 山行総覧

山行名	期日	場所	参加者 3年	2年	1年	教員	西朋
新入生歓迎会	4/22	奥多摩 御前山	5	3	3		林，西入，加藤 山田
5月月例山行	5/12~13	大菩薩	2	3	3	1	
6月月例山行	6/4~10	丹沢 三峰		3	3	1	荻田，武内
夏山合宿	7/26~8/1	燕岳~烏帽子岳		3	3	1	浜田，吉田，加藤
女子夏山合宿	8/2~6	白峰三山		2		1	荻田，武内，柳沢
沢登り	9/14~16	巻機山 米子沢		3	4		浜田，荻田，加藤
11月月例山行	11/2~4	鳳凰三山		3	4		山田，武内
スキー合宿	12/25~30	高峰高原		3	4		荻田，浜田，松本(健)
1月月例山行	1/19~20	那須		3	3		山田，西入
春山合宿	3/26~4/1	上河内~光岳		2	4		吉田，加藤

1983年度 西高係報告　　中野敏彦（29期）

毎月の月例山行，夏山，スキー，春山合宿と例年通りの活動を行ったが，10月の春山偵察山行において，下山予定日を過ぎても下山しないという事件があった。

西朋が同行しておらず，遭難という万一の事態も考えて，直ちに対策本部を設置し，情報収集活動等行い，現地へも急行した。幸い，翌日昼前に全員無事下山したが，関係各位に多大な迷惑をかけた。善後策として，学校，父兄に事件の報告を行い，11月山行を自粛した。

このような事件は，今回が始めてというわけではない。今後，このような事件が再発しないように，西高生とともに西朋の指導体制を再確認していく必要がある。

時代の変化とともに，高校生の山への考え方や，活動体制が変化してきており，また，登山指導者の社会的責任の高まり等を考えると，その必要性は高い。高校生に対する良き先輩"西朋"として，高校生をのびのび活動させてやると同時に，充分に考え方を伝え，チェックしていきたいものである。

最後に，今回の事件にあたり，協力して下さった会員各位にこの紙面を借りお礼申し上げます。また，今後とも西高生への指導等よろしくお願いします。

1982,1983年度 活動報告

青谷知己

(1) 山行記録

1982,1983年度の山行総覧をみると、前年までの山行の多様さと比較すると低調のうちに終始したことは否めない。その一つは前年まで山行をリードしてきた森下氏のわらじの仲間への転向。もう一つは、1,2年生の学生会員の減少という世代交代のギャップの時期であったことがあげられよう。学生層の手薄さは、長期休暇中の合宿が組めない。また、西高ワンゲル部への指導の不徹底等にあらわれている。

しかしながら、1983年度には新人の大量加入により、従来の五月合宿、また、岩登りを中心にすえた夏合宿、バリエーションのトレーニングを主とする冬合宿等、数年前までの西明が中心にすえてきた長期合宿が復活してきている。森下氏が東北や上越の沢を主体として合宿を組んだことに対しては、山行が旧態に逆戻りした点であまりほめた事ではないが、長期的にみて新人を育成するという点では効果をあげているといって良いだろう。また、青谷を中心とするリーダーも、次の飛躍を願って今は次の世代の育成期間と考えている。

さらに、山行に目を通すと、合宿の充実に比較して、その間を埋めるべき山行が乏しい。特に冬期においてみるべきものがないことは残念なことである。冬合宿をバリエーションの導入としてみるならば、それをステップとした山行が組まれて当然である。例年学生層が試験の時期にあたることにその弱点があるが、より積極的な取組を望んでおきたい。また、冬期において山スキーの導入がみられてきた。新鮮な山行形態として、これに続く山行が形作られていくことを期待する。

西明19にみられたガイドブック的山行への批判であるが、新人の中にもより新鮮な、人の行かない山に目を向ける姿勢がみられる事は評価されてよい。より個性ある山行をおめていってもらいたい。

(2) 森下氏遭難について、

この件については別刊遺稿追悼集にまとめ詳細の報告をしたので参照願いたいが、ここではあらましを記す。

森下益夫氏は、わらじの仲間に山行の中心を移した矢先に、昭和58年8月21日、守内本高地沢にてあっけなく逝ってしまった。全く信じ難いことである。

西明でも34年の滝谷B沢での遭難、44年の福田青明氏の黒部での遭難、その度の悲劇を味わい、一時は10年目のジンクスという言葉でその再発を恐れ防止に努めてきたが、忘れた頃に、また、この悲しみを迎えたことに大いに悔いを残す。

森下氏は西明20,21号にみられるように西明の山行をリードしてきた。西明の新しい山行スタイルを確立しつつあったように思う。山への情熱は、ここ1,2年毎週のように山行を重ねていた事に証明される。沢登り、冬の合など新鮮な対象に我々を導いてくれ、氏の先見性のある姿勢は誰もが認めるところである。西明の活動がここ1,2年鈍ったこともあり、氏は仲間を求めて他の会へ活動の場を求めていった。西明が森下氏の受け皿になれなかったことは、今更ながら残念な思いで一杯である。氏の遺志を継ぐためにも、西明を活力ある組織に改変していくことが、我々のせめてもの努めであろう。

<追記>

59年8月15日～16日、一周忌追悼山行として、わらじの仲間会員とともに守内岳集中山行。あわせて遭難現場にプレートを設置した。

59年12月1日、森下益夫遺稿追悼集発刊。

(3) 西高指導について、

最近、特に高校山岳部の活動については、教育庁等の指導が厳しくなっており、学校側の姿勢も活動内容について厳しい線を打ち出している。我々としても最近の状況にかんがみ、西高生の指導についてはますますきちんとした対応がせまられているといえよう。ここ1,2年の意志疎通の不徹底がさらに不安をかき立てているようである。

西高係を中心として十分な相互理解の上、高校生本来の縦走山歩きとテント生活を中心にすえた、おおらかな山行が継続されることを願ってやまない。最近強く恐しき伝説の広がりを断ち、原点に帰って、同行したOBはきちんとした基礎の徹底を計っていただきたい。なお、西朋本来の山行との重複もあって、会独自の山行が分散される事もあるので、社会人の方々にぜひ同行をお願いする次第です。

(4) 会務について

a. 例会

82年度は山行の低調さを反映して不定期となった。83年度は、第2土曜日を例会として、荻窪コーヒー園にて開いた。

b. 総会

82年4月、83年4月に開催。社会人層の参加少なく、充実が望まれる

c、西朋通信を6月、各年について作製。会計報告、山行報告等とあわせ、全会員に配布した。

d、58年9月、森下氏

e、会報 1981、82年度分を22号として発行する。

1984年度 会務報告

青谷 知己

○学生層の人数が増えてきたことにより、まとまった合宿が行えたのは収穫であった。

5月の大源太山はマイナーな山域で、雨中のやぶこぎという苦しい山行であったが、得るものも大きかったように思う。8月の小黒部谷は、沢自体の面白さにもう一歩であったが、長い谷の遡行は学生層にとってはじめてであっただけに、今後の方針を与えてくれたのではないか。また、冬合宿は、場所の選定に苦しんでいるが、八ケ岳の東面で一応の成果があった。

一方、春・秋の沢シーズンは、個人的に意欲的な山行が計画されたが、いま一歩の感がある。学生層がさらに充実するであろう、次年度に会としてのまとまりのある山行を期待したい。また、冬のシーズンは、暖冬のせいもあって、氷壁りも散発に終わったが、山スキーへの取組がいよいよ活発化しそうな気配である。

○西朋活動部隊も西高30期の中頃の時代に移っている。故森下氏が目指した、社会人をも含めた奥深い山行の実践のためには、学生層以外の社会人にも、何らかの形で西朋を支えていってもらわねばなるまい。ここ1・2年、期を越えた交流も途絶えがちである。会員数も百を越え、西朋の再編が必要とされていると思うが……。

- 例会　第2土曜日、PM 6:00～9:00 荻窪区民センターにて。
- 会費　年額一律 3000円、集まりは良くない。
- 会報　・わらじの仲間、若林・宮内氏らとの共同編集
  「見果てぬ山へ・森下道夫遺稿集」
  を発刊（12.1 発行）
  ・西朋 22（1982～1984の山行記録）を発行する。

ファンタジーのすすめ

山本 泉

人間が神様に似せて作られたとしたのなら
人間だって神様の真似がしたくなります。
現実の世界でそれが全く不可能ならば、
空想の世界で、
一つの世界を作ってもよいではありませんか。

現実の世界で、
人が無限の可能性を生かせないのならば、
ファンタジーの世界の中で、
その可能性を実現させてみれば、
本当に無限の可能性があることに気がつくでしょう。

小さなホビットの勇気，エルフの歌声，
ゴクリの指輪への執念，
サウロンとナズグルの恐怖，
サルーマンの変節とガンダルフの活躍。
トールキンの世界にひきずりこまれる。[1,2]

ヤギ番の少年と魔法
竜とのたたかい
巫女との法使い
海と嵐、地の果てへの旅
ル・グウィンの世界も面白い。[3]

衣装ダンスを抜けて
白い魔女とフォーンのいる
ナルニア国にも行ってみよう。[4]

cf. 1) J.R.R. Tolkien : The Hobbit 邦訳 岩波少年文庫 ホビットの冒険
2) J.R.R Tolkien : The Lord of the Ring 邦訳 評論社文庫 全6冊
3) ル・グウィン : ゲド戦記（全3冊）岩波書店
4) C.S.ルイス : ナルニア国物語（全7冊）岩波書店

森下さんを悼んで

26期 遠藤 彰

悪い夏が終わろうとしている。

今年の夏は始めから良い事がなかった。そんな気持ちを振り切って盆休みに山へ行った。東京へ電話をかけてパートナーを探すと、折り良く谷川岳へ行く計画があって、それに便乗して何年かぶりで一ノ倉沢の二ノ沢を登れた。天気も良く、それなりに充実した山行だった。

二ノ沢に初めて行ったのは大学1年の秋だったから、もう7年も前の事になる。雨で大滝に辿りつけずに追い返された。僕にとって初めての谷川のバリエーションルートだった。その時のリーダーが彼だった。西朋としてもその前に一度、そして今年の初夏にもまた、雨で退却を余儀なくされていた。縁の薄いルートなのかもしれない。

この八月の一ノ倉出合のテントサイトで僕達は彼の事を話していた。その一週間後にはもう僕達の手も声も届かない所へ逝ってしまうなどとは夢にも思わずに……。

告別式で中尾が弔辞を述べ始めた時、もう僕は涙を止めるすべを失っていた。それは僕が述べる予定になっていた弔辞だった。今、正直にいって僕には恥ずかしくてとてもその役を務められなかったことを白状しなければならない。

彼、森下通夫さんが「西朋」No.20で述べたような登山における時代区分を彼自身にあてはめてみると、高校時代のアプローチ期、岩壁に情熱を燃やした大学時代、社会人となってからの彼の「心の山」とでも言うべき西上州を中心とした埋もれた、人跡稀な沢の時期、そして、その延長としての「わらじの仲間」入会、となるのか？

「岩」の時代でも、ただがむしゃらにグレードを追いもとめるのではなかった。自分の好みに合った、良いルートだけを幾度失敗しても諦めることなく執拗なまでに繰り返し挑戦していった。谷川の滝沢第三スラブ、衝立岩重複ルート、甲斐駒赤石沢奥壁、左ルンゼ、周南衛星ダイヤモンドフランケ、奥鹿島菱形岩壁（これはアブミに乗ったままビバーク後退却）…。これらは、僕達が岩登りを始めた頃の憧れのルートであった。また、彼は別なバリエーションとしての渓谷もこの時期から志向していた。すなわち、北又谷、柳又谷など人の少い、いわゆる名渓に憧れていた。

西朋でEBシューズを持ったのは彼が最初だったと思うが、彼らにハードフリーの風潮に流されることなく（それを横目で睨みながら）、彼は別の山を求めていった。

彼にとって山は、デーモンの隠れる魔境ではなく、牧神あるいは、八百万の神々が遊ぶプレイグランドであるべき所だった。そして、いたずら好きな神々は彼をも仲間に加えてしまった。本当にそうとでも言うしかないような逝き方だった。

さて、西朋にとって彼はどのような存在であったか、ここで改めて考えてみたい。また、それを通して西朋とは何なのかも…

彼が西朋に入った昭和44年頃は、ちょうど世代交代の時期で、主力メンバーが大学を卒業し、実働会員である学生が非常に少かった。極端な言い方を許して頂ければ、また、一からやり直さねばならない状態だった。これは西朋にとっては周期的に訪れるやむを得ない現象なのか。

ともかく、3年目でリーダーとなった彼は、中尾というパートナーを得て岩に情熱を燃やす。このコンビはどちらが欠けてもあのような記録とはならなかったであろう。何度も中返し、追い返され、しかし結局は望んだほとんどを手中に納めた。また、この頃には後輩の学生会員も多くなり、岩と雪のバリエーションも充実つつあった。もっとも、松本哲郎が「西朋」No.19で、また、青谷がNo.20で繰り返し指摘した様に、自らの反省としてその多くはガイドブック的なものであった。しかし、それを責められるのは他ならぬ自分たちだけではないだろうか。

この頃の集会では地味でも着実に地域研究を目指そうと提唱する彼と、たとえ手抜だらけ

でもまだ登り残したよいルートもトレースしたいという我々後輩の多くとの言い合いが続いた。「あなたは卒業した。けれども僕達はまだ登ってみたい。あなたのいう事はその後にしたい…。」そして、僕等の意見が通った時、彼は諦めとも憐みともとれる微笑を漂わせて黙った。それは森下さんが独標登高山の会報から引用している様に（西朋No.20，P47）彼自身のもどかしさでもあったろうと、今にしてわかるのだが…。

やがて彼は、社会人となり、学生時代の様な長期の休みはとりにくくなる。これはほとんどの人に共通する事で、当然といえる。そして学生山岳部的性格の強い西朋の場合には多くの会員は次第に山から遠ざかる。けれども、彼は母胎的な甘えが許されなくなると、西朋を本来の社会人山岳会として改革しようとした。まず、集会を平日にして週末は有効に山行に使えるようにした。そして、毎週のように山へ行った。また、個人的には記録を求めて、各山岳会の会報などの資料の収集に精力を注ぐ一方、民俗学などにも関心を持っていたようだ。阿佐ヶ谷の總高書房の和久井氏の紹介で「日本山書の会」に入会したり、ビルフィス山の会（当時）の小泉氏等から古い山岳会報をコピーさせてもらっていたそうである。（蛇足ながら彼は一時期、古本屋になりたがっていた事がある。）

そしてまた、周期はめぐり、西朋の学生会員は減った。上州や会越、東北の沢を中心とした山行に同行したのは青谷を始め数人いるが、彼にすべてのペースを合わせられるはずもなく、彼らにしても、そのすべてが自分の好みに合っていたわけでもなかろう。彼が西朋に入ってようやく西朋らしさ、会としてのユニークさが出始めてきた時、会は彼にとって苦足の行くものではなくなってきはじめたのだろう。

そうして、西朋に明らかな一時代を築いて森下さんは西朋をさった。より自分の求める山行ができ、彼の求める資料も膨大なものを持つ「わらじの仲間」へ…。

森下さんが西朋に残したものは、3冊の会報だけではない。（会報は、西高の現役諸君が10年ぶりに「彷徨」を出す刺激となり、見本となった。）これからの山行の一つの方向と可能性をも彼は残してくれたと思う。

彼の文章が一番良いと言っていたのは、「西朋」No.19を編集した松本哲郎だと思う。それは決して上手な文章ではないかもしれない。けれども、森下さんの山に対する情熱と愛着がにじみでている文は読む者にも感動が伝わる。ほんとうに登りたい山を登った人だから、そのおもいが素直に出ている文だから…。

深沢右股をはじめ、数多い彼の単独行の文は特に味わい深いと僕は思う。

一年後輩でありながら彼の活躍にはほとんど何の手伝いもできなかった僕は、ただ心から森下道夫さんの御冥福をお祈りするとともに、事後の事について皆さんに感謝する次第です。

「西朋登高会」とは…

ところで、森下さんの事故の少し前から考え始めていた事をしばらく述べてみたい。

西朋創立当時の事を僕は極くわずかしか知らない。間違っていたらお許し頂きたいが、そもそも西朋は西高山岳部のOB会としてつくられた会のはずである。山に登るための会として…。

僕が西朋に入ったのは、大学でも山に登りたかった事、大学でまた一からやり直すより、気心の知れた先輩、同期、後輩達と登る方が良かったからであり、これはほとんどの会員も似たりよったりだと思う。そして、高校時代お世話になった恩返しもしなければ、という責任感（同行する時は責任感の塊だったつもりだが）。付け足せば、極ぶるような暮らしをしておられるK先輩の甘言に乗せられて。

また、言葉を替えれば、東京周辺の大学に入学して山をやるなら、西朋に入るのが自然だった。だから、山に登るためだけに、山岳会の一つとして西朋を選んだというわけではない。そのためかどうか、西朋は山に登らなくなった会員も寛容に認めてきた。山に登るためだけの会ではないから…？

会としての目的、また役割りの重要な1つに西高現役の世話がある。そのためだけにも西朋は存在する意味はあり必要もある。けれども、それだけではあまりに寂しい。

最近、大学山岳部は衰退しているといわれる。部員数も少なく、特長ある山行もそれほど目にしない。ベある学生は一般の山岳会へ入るという。しかしまた、社会人山岳会も「同人化」の現象が見られるらしい。確かに雑誌等をみていて興味深い記録の多くは、同人的なグループによるものである。そして、プロによる講習会、ガイド付き登攀が盛況だという。都合の良い的に技術的に信頼のおけるプロと登る。雑誌にはその案内広告がたくさん載っている。

西朋の会としての性格は特にひとつに規定しなくとも良いと思う。その時代ごとに、その時々の主力メンバーが性格を作って行くだろう。ただ、少くとも実際に山に登る会に対しては、幾つかお願いしたい事がある。

まず、もっと他の会との交流があっても良いと思う。森下さんの関係で、「わらじの仲間」の方々とつながりができた。僕は青谷を通して間接的にしか知らないが、このつながりは大事にしていきたいものだ。僕の知る範囲では、これまでに例えば都岳連への加入などといったことは話に上ったことはない。遭難に対する準備として初期処置が最も重要であると考えられるが、現時点で事故が起こった場合、果たして我々だけで対処しきれるだろうか。もちろん他の人をあてにするというのではないが、技術講習会などへの参加は考えるべきだろう。

近頃、伝統ある山岳会の創立数十周年を記念して刊行される会報がよく目にとまる。また、実力ある会の年報もよいものが多い。特に興味のあるものは照会し入手したが、ほとんどの会の方々はとても親切に送って下さった。一面識もなくても、ただ、同好の士だということで示される好意は期待以上にうれしい。できればその好意に報いたいが…。

また、無理を承知でお願いしたいのは、どこかに定着したルームを持つ努力をして頂けないものか？例会の場所として、また資料の置場所としての。山岳会としての目に見える伝統を残す事は大変重要な事と考えられる。その端的なものは、この会報「西朋」だが、自分達の会の古い記録くらいはすぐに見ることができるようであってほしい。「伝説」ではなく後輩へ残す資産として「西朋」やアルバム、その他の資料を揃える場所が欲しい。管理等の問題は山ほどあるだろうが。

以上、地方に住む会員として、満足に山行や会の運営に参加できない身でありながら、勝手なことを書きました。

この拙文を書き始めたのは去年の秋だったが、もうすぐ森下さんの一周忌。合掌。

（1984.7.21.）

編集後記

今日、広沢寺の岩場へ行ってきた。竹の緑がいよいよ濃く、もう初夏を思わせていた。自分ももう西朋の3年目、下の代も増え、会の中核になってきた感じがする。それにつけても思い知らされるのが自分の未熟さである。まだまだ誰かについていく新人気分が抜けない。早く考えを改めなければ先がないと思うこの頃である。

この会報にしても、編集を受け継いでから1年半以上かかってやっと刊行にこぎつけることができた。つくづく自分の怠惰さを思い知らされたような気がする。今は何とか本という形になってほっとした気持ちでいっぱいだ。ただ、これからは3年分まとめてではなく、1年分でも同じくらいの分量の会報ができたらいいなと思う。また、実働できる学生会員の増えた今、それが可能なはずである。

山は人に押しつけられるものではない。自らが憧れ、計画し、実行するものではないだろうか。

(1985, 4. 29　　YAM.)

西朋　22号

1985年6月10日発行

発行者　西朋登高会（会長　渡辺喜仁）

発行所　東京都杉並区阿佐ヶ谷北 5-9-13
渡辺喜仁付　西朋登高会

編集者　青谷知己、山田裕久

印刷所　東大出版会